

災害メモリアルアクションKOBÉ

ACTION 2021

伝える大震災、つなげる防災

目 次

開会の挨拶	1
活動発表	
兵庫県立舞子高等学校	2
兵庫県立明石南高等学校	5
滋賀県立彦根東高等学校	8
国立明石工業高等専門学校 D-PRO135°（明石高専防災団）地域連携チーム	12
国立明石工業高等専門学校 D-PRO135°（明石高専防災団）開発チーム	15
神戸学院大学 現代社会学部 社会防災学科 安富ゼミ	19
関西大学 社会安全学部 奥村研究室	23
兵庫県立大学 防災リーダー教育プログラム	26
パネルディスカッション	29
グラフィックファシリテーション記録	44
閉会のあいさつ	45
災害メモリアルアクション KOBÉ2021 のことば	46
プログラム	47
委員・学生名簿	49
発表風景等	51

災害メモリアルアクション KOBE ACTION2021

「KOBE のことば」

日 時：令和3年1月9日
開会 午前10時00分



牧企画委員長

○牧企画委員長

皆さん、おはようございます。それから、新年明けましておめでとうございます。

それで、今年の1月17日で阪神・淡路大震災から26年ということになります。今年はというより、昨年から、御存じのように、このコロナということで、大変な状況になっているわけですが、やはりこういった伝えるという活動をきっちりと毎年続けていくということは、非常に重要だというふうに考えまして、リモートと、それからこういう実際のところをうまく組み合わせて、それからできるだけ人が集まらないような形をもって実行をさせていただくということにさせていただきました。

それで、今年で26年になるということですが、この災害メモリアルという名前がついた試みは、災害の年から始まってございまして、初めは「メモリアル・コンファレンス・イン神戸」という形で、後でもお話をしますが、災害復興に関わる方々が皆さん集まって情報交換をするという形で続けられてきました。

そのときに組織委員長を務められておられました新野幸次郎先生ですが、残念ながら12月13日にお亡くなりになられたということでございます。我々の、この試みの大先輩ということですので、ここで申し上げて、御冥福をお祈りしたいと思います、新野先生に。

それで、当時ですね、先ほど河田先生に確認したんですが、河田先生が私のような実行委員長ですかというふうに申し上げたら、「違う、俺がまだ幹事長や」という、そういう時代でございまして、この26年という時間が、どれだけ長い時間であったのかということのを思い返すわけでございますし、たしか新野先生は、当時、あまりお若い方は知らないかもしれませんが、この復興計画ですね、神戸市、それから兵庫県の復興計画の取りまとめ役をされましたし、それからこの人と防災未来センターの構想委員会の座長も務められたという、大変、この復興、それからこの震災の語り継ぎということに対して中心的な役割を果たされた先生ですが、新野先生、当時、たしか俺は70歳やというふうにおっしゃっていたというふうに河田先生からお伺いしまして、それから26年ということですので、大変御長寿をされたというふうに思います。

それで、この災害メモリアルアクション KOBE ですが、何をやろうと思っているのかということですが、これ、皆さんに何度もお話をしてございますが、だんだんと時間が経過しますと、震災を体験していない人というのが増えてきます。ただ、そういった人たちが震災のことを伝えてはいけないうのと言っていると、決してそうではなくて、そういった皆さんが震災を伝えていかないと次の世代に伝わっていかないということですので、ただ震災を体験していない人が震災を体験していない人に伝える仕組みというのをつくり上げたいというふうに考えて活動してございます。

それで、この図、いつもお話をしてございますが、先ほどお話をしてしまいましたが、今年の3月11日で、今度は東日本大震災から10年ということになります。

東日本大震災、この10年というのは、先ほどお話しした「メモリアル・コンファレンス・イン神戸」と同じように、実際にこの復興ということが進んでまいりますので、その中の情報共有をいかにしていくのかということが非常に重要なことだと思いますので、そういったフェーズから、それ以降は、じゃあ東日本大震災もほぼ同じでございまして、震災10年がたつと、小学校には、だんだんと震災のことを知らない子供たちが増えてくるという、そういう時代になりますと、恐らく東日本大震災を次は語り継ぐというモードに入っていくんだと思います。

我々、この神戸も、そういう形で、10年目から20年目は語り継ぐということをやってきたわけですが、我々、この30年目を目指して活動をする、この神戸の地で、今、我々が何を考えているのかということは、先ほど申し上げましたように、もう知らない人がいるというのが前提で、それをどう語り継いでいくのかということと、もう一つ、その右のほうに見えてございますように、南海トラフ地震というのが近づいておりますので、語り継ぐだけではなくて、それをアクションにつなげていくためにはどうすればいいのかという試みが重要だというふうに考えてございまして、我々、やはり一番先頭を走るランナーだという自負もございまして、何を考えているのかと言っていると、実は30年後以降、どうやったら語り継いでいけるのかという仕組みを今考えているということとでございまして、ぜひ一緒にやりたい。

今日、お若い方、この後、御発表いただきますが、別に年寄りが答えを知っているわけではございません。皆さんと一緒に考えていきたいというふうに思っておりますし、我々、こういう人ができる役割は、こういう場所をつくって、そういう機会をずっと継続していくということが、だんだん年をとってきた私どもの重要な役割かと思っておりますので、こういった場をずっと持ち続けるということ、それから皆さんと一緒に考えていきたいというふうに思って、今日は、これからお昼までの時間を過ごしたいと思います。

それで、本日はよろしく申し上げます。

兵庫県立舞子高等学校



災害メモリアルアクションK O B E

兵庫県立舞子高等学校

★目的

同年代に語り継ぐ～未災者の視点だからこそ見えることを～

★活動内容

インプット

- ・学校の先生方へインタビュー（2019～）

アウトプット

- ・インタビュー結果をもとに年表と冊子を作成
⇒・学校内で配布予定
- ・1.17震災メモリアル行事で発表

～舞子チームの紹介～

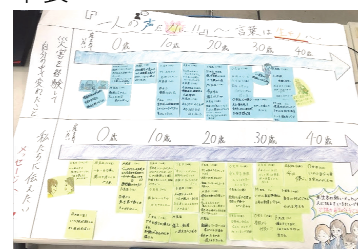
環境防災科の1年生3人、2年生2人、3年生3人の計9人で活動しています。これから生きていく年代をターゲットに、私たちだからこそ伝えられることを活動を通して伝えていきます。

★インタビューから年表・冊子まで

発生時何をしていたか (当時の様子)	心の支えになったこと (もの)
当時：4歳 ベランダのカーテン越しに人がいると思った。寝ていて地震と分らなかった	家族
災害を経験して 変わったこと	私たちに 伝えたいこと
地盤の固い、しっかりとしたところに住もうと思った	私たちが住んでいる町で、地震はいつ起きてもおかしくない！だから起きた時の動きを確認しておくことが大事！！

M先生の場合

年表↓



冊子↓



★振り返って

今年度は新型コロナウイルスの影響で活動の幅が制限されてしまいました。インプットでは地域の方々にお話を伺うことができず、アウトプットではたくさんの方に震災を知ってもらう機会が少なくなっていました。来年度はコロナ禍でもできるインプット・アウトプットの方法を考え、未災者に震災を語り継ぐ活動を行っていきたいです。

★伝えたいこと

震災から26年が経過した現在、阪神・淡路大震災を経験していない神戸市民の割合は5割になるといわれています。未災者が増えている中、阪神・淡路大震災を語り継がなければこれから起こる災害で同じ被害を繰り返してしまいます。そうならないためにも「語り継ぐ」ことは必要です。震災を経験していないからこそできる伝え方があります。未災者である私たちが未災者に震災を語り継いでいきます。

○**兵庫県立舞子高等学校 1** 今から舞子チームの最終報告を始めます。発表者は、3年松岡、宮本、2年三好、1年大崎です。よろしくお願いします。

今回の最終報告では、舞子チームの紹介、目標、活動報告、来年度に向けての4つをお話ししていきます。

まずは、舞子チームの紹介です。今年度は、3年生4名、2年生2名、1年生3名の計9人で活動してきました。過去の活動では、阪神・淡路大震災や防災に関する被災者と未災者の意識の違いや、実際に阪神・淡路大震災で被災した方が震災を経験していない未災者に伝えたいことは何かなどを調査するために街頭アンケートを行いました。また、その街頭アンケートの結果を基に南あわじ市の小・中学校に向けて出前授業を行うなど、インプットとアウトプットを大切に取り組んできました。

次は、最近の主な活動です。新型コロナウイルスの影響で活動の幅が制限されてしまい、外部に出てアンケートを実施することができませんでした。そのため、今年度は、舞子高校の先生方を中心に被災体験を伺いました。そして、それを冊子や年表にまとめ、同年代に語り継ぐ活動を行っています。

○**兵庫県立舞子高等学校 2** 私からは、舞子チームの目標を発表します。

私たちの目標は、「同年代に語り継ぐ～未災者の視点だからこそ見えること～」です。この目標は、被災者の話を聞いて、自分たちのチーム内でインプットし、震災を経験していない人にアウトプットするという、被災者と未災者をつなげたいという意味が込められています。

そして、私たちが一番ポイントとして捉えているの

は、同年代です。似たような言葉に同世代があり、どちらが自分たちの目標に沿った意味になるのか辞書で調べてみました。すると、同年代には、同じ時代に生きている人々、同世代には、同じような年齢という意味がありました。これから生きていく年代をターゲットにしている私たちには、同年代という言葉のほうがぴったりだと思い、決定しました。

また、この目標を去年から引き継いでいる理由は、新型コロナウイルスの影響もあり、昨年度の作業が中途半端に終わってしまったからです。

次に、1年間の活動結果について発表します。

昨年10月から先生へのインタビュー、冊子づくり、年表づくりをしています。冊子・年表に関しては、昨年度つくったものに追加しています。先生方へのインタビューについては、今年度、新しく赴任された先生方を対象にインタビューさせていただきました。

○**兵庫県立舞子高等学校 3** 私からは、先ほどのスライドにもあったインタビュー、冊子、年表の3つの活動の内容について、お話しさせていただきます。

まずは、インタビューです。インタビューでは、被災当時は何をしていたのか、心の支えになったものや人、災害を経験して変わったこと、私たちに伝えたいメッセージの4項目を中心に、舞子高校の先生方にお話を伺いました。先生方の中には、当時四、五歳だった方から、既に教師として働いていらっしゃる方までおられたので、幅広い年代の方にインタビューをすることができました。

今年度、インタビューをした先生の中で、当時小学生だった方がおられ、プレハブ校舎や屋外で授業をしていたというお話を伺いました。私は、このお話を聞





き、当たり前のように教室で授業を受けることができるということは、とてもありがたいことなのだと感じました。

そして、これらのインタビューで聞いた内容を多くの人に知ってもらいたいという思いから、冊子や年表にまとめました。

こちらのスライドの写真は、インタビューをまとめた冊子です。色やイラストを入れることで、見やすくなるように工夫しました。実物は、このような感じになります。

そして、こちらのスライドの写真が年表です。写真は、昨年度のものですが、今前（＝舞台）に開いてあるものは、今年度の内容を追加したものです。年ごとにインタビューの内容が見られるよう、透明なシートを使用し、昨年度の年表の上に今年度のインタビューを重ねてつけ加えました。年齢別にしたり、インタビュー結果のまとめを年度別に整理したりすることで、より見やすく、また比較しやすくなるように工夫をしました。

これらの作成した冊子や年表をコピーして配布したり、全校生に見てもらえるようにすることが、現在の私たちの目標です。

○**兵庫県立舞子高等学校4** 最後に、舞子高校の来年度に向けての活動と、その活動を行っていく上での課題点についてお話しします。

今後の活動として、私たち舞子高校は、来年度に向けて冊子と年表の作成を来年度も継続していきたいと思っています。

継続しようと考えた理由は、私たちが行っている、こういった活動を通して、人から人へ、そして国から

国へと震災の経験や教訓が伝わっていき、世界中が災害に強いまちづくりを目指すようになることを理想としているからです。とても高い理想ですが、私たち未災者が行う活動や取り組む姿勢は、社会を大きく変えることができていると思っています。

しかし、継続していくに当たって、冊子や年表について課題となる点が出てきました。手作りで作成すると、つくった人の思いが伝わりやすく、また未災者がつくっているため親しみやすい表現となり、他の未災者にも影響を与えやすいというメリットがあります。その一方で、大勢に配布する形にしにくいというデメリットもあります。

そこで、冊子や年表のデータ化という案が出ました。データ化することで、配布しやすく、若者の目に留まりやすいというメリットがある一方で、手作りよりも安っぽく感じてしまうというデメリットがあります。より多くの人の手に取ってもらうためには、配布のしやすさとつくった人の思いの伝わりやすさのどちらを重視するかが、今後の活動の課題点となっています。

今年度は、新型コロナウイルスの影響により活動の幅が制限されてしまいましたが、来年度は、コロナ禍でもできるインプット・アウトプットの方法を考え、私たちが理想としている高い目標に一步でも近づけるよう、未災者に震災を語り継ぐ活動を行っていきたいです。

これで、舞子高校の発表を終わります。御清聴ありがとうございました。

兵庫県立明石南高等学校



めいなん防災ジュニアリーダーMRDP

【活動テーマ】絆～地域で繋がる防災～

活動の目標

「楽しく防災」

昔の人が生活の知恵として日常生活で行ってきた「防災」を高校生の視点で取り組んでいます。このチームは生徒会や部活動や委員会ではありません。防災、地域づくりに関心のある有志生徒による**高校生の自主防災組織**です。

M(meinan)R(regional)D(disaster)P(prevention)は地域防災に取り組むチームとして名づけました。

1. プロフィール

2013年

兵庫県教育委員会教育企画課の事業で誕生した。

※生徒会・ボランティア部の生徒

2014年から公募開始

(1年生対象)

※公募にした理由

災害発生直後に動くのは被災者自身で特別な人ではない！

⇒「自助」「共助」の観点

「いつでも・だれでも」

令和元年は15名が参加。

⇒生徒による自主防災の実践グループです。

コンセプト



土手の花見



3. 2020年度の主な活動(12月まで)

4月 - 5月

●全国一斉休校直前にボードゲーム「にげろ！あにまるず」の続編となる「かいけつ！あにまるず」が完成！

●休校中の課題に取り組む

課題(1) 休校中の全国の仲間への応援メッセージを作成。

課題(2) 「今、明南が避難所になったら…」という想定でコロナウイルス対策を含めた避難所運営を考える。

6月

●新加入の1年生も交えて子ども向けの防災動画を制作。

7月

●「先輩から後輩へ」

上級生が新加入の1年生にHUG(避難所運営ゲーム)、オリジナルゲームなどを教える。

9月以降

●各種イベントでのプレゼンテーション

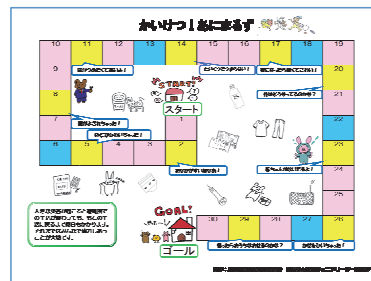
(1)災害メモリアルアクションKOBÉ

(2)防災ジュニアリーダー活動報告会

※予定 3月24日-26日 東日本大震災復興支援ボランティア(宮城県本吉郡南三陸町)

◎MRDP Original Boardgame「にげろ！あにまるず」「かいけつ！あにまるず」

2018年チームで考案した高齢者から子どもまで楽しく防災に取り組める体験型ゲーム「にげろ！あにまるず」を地域の防災訓練で実施しました。これは、家族が地震発生から避難グッズを持って避難所に急ぐという趣旨のゲームです。2019年明石高専D-PRO135°との交流を通じて「にげろ！あにまるず」のゲームボード版が完成しました。さらに、2020年の4月に続編の「かいけつ！あにまるず」が避難所に着いたあにまる一家が避難所で起こるトラブルを解決しながらゴールに向かうというものです。



ボードゲーム版は3～4人のチームで3チーム対抗で実施します。もちろん、チームでなくてもOKです。

◎2020年度の主な活動



6月 1年生への説明会



8月 先輩から1年生への学習会



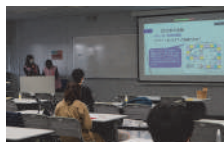
9月 災害メモリアルアクションKOBÉキックオフミーティング



11月 防災ジュニアリーダー活動報告会



11月 オリジナルエプロンシアター「ぐりちゃんたいへんだ！」作成



11月 災害メモリアルアクションKOBÉ中間報告会



11月 3年次防災教育ホームルーム



12月 2年次防災教育ホームルーム



12月 1年次防災教育ホームルーム

めいなん防災ジュニアリーダーMRDPは防災の原点である地域での繋がりを目標に楽しく活動が続けます。

○**兵庫県立明石南高等学校 1** 皆さん、こんにちは。「めいなん防災ジュニアリーダーMRDP」です。よろしくお願いします。よろしくお願いします。

まず初めに、チームの紹介をさせていただきます。「めいなん防災ジュニアリーダーMRDP」は、有志による地域防災に関わるチームです。

MRDPとは、「M (Meinan)」、「R (Regional)」、「D」と「P」は (Disaster Prevention) 地域防災チームの略です。東日本大震災の2年後に、教育委員会の企画で誕生しました。

最初は、生徒会やボランティア部の2年生5人で1期生がスタート、その後、2期生として、生徒会の1年生が入りました。次の年、1年生が候補して、1人の男子1名が参加、ここからめいなん防災ジュニアリーダーが始まりました。2学期から入った3人を加えて、3期生4人が本格的に活動を開始しました。

その後、4期生は、男子3名、女子1名、この4期生を最後に、次の5期生から、全員が女子のチームになりました。

このとおり、最近はメンバーの人数も増え、明るくにぎやかで楽しいチームになりました。しかし、もう男子は入る余地がないと思われます。

めいなん防災ジュニアリーダーMRDPの活動理念は、「土手の花見」。「土手の花見」とは、冬の間に凍って緩んだ川の土手を、春に花見に来た村人に踏み固めてもらう。大雨で増水しても、土手の決壊を防ぐことができる。しかし、花見に来る村人がいなければ意味がない。日常の地域でのつながりが防災に結びついているということです。

私たちは、部活動や生徒会などの決まった集団と違って、偶然出会ったメンバーと緩いつながりで活動

しています。この緩さが、自由に楽しく、取り組める理由となっています。

めいなん防災ジュニアリーダーMRDPの活動は、3つに分けられます。

1つ目は、校内の活動です。文化祭で南三陸町への募金、職員研修会、防災教育ホームルーム、1.17阪神・淡路大震災追悼行事などを行っています。

2つ目は、校外での活動。ファミリー防災教室、まちづくり協議会「HUG」講習会、ふれあい防災セミナー、防災教室などを行っています。

そして、3つ目は、地域でのボランティア。地域の方々とつながるために防災以外のイベントにも参加しています。

○**兵庫県立明石南高等学校 2** 私たち、めいなん防災ジュニアリーダーMRDPを創設してから、今までたくさんのことをしてきました。

3期生では、風船でバケツリレーを幼稚園で行わせていただきました。そこから、段ボールトイレ、段ボールスリッパ、簡易ろ過装置、空き缶こんろ、「きずな焼き」などをつくらせていただきました。

私たちは、「にげろ！あにまるず」というゲームを作成しました。コンセプトは、家族で楽しく防災を楽しむ体験型ゲーム、手作り感覚でつくっています。

「にげろ！あにまるず」は、一家族4人で、中に1人、障害を持っていたり、体が不自由な人がいて、全員で協力して障害物を乗り越えて体育館に避難するゲームです。(動画)

昨年、この「にげろ！あにまるず」をボードゲーム版にした「にげろ！あにまるず」を作成しました。広い体育館だけではなく、教室やほかの場所でも簡単に





行えるように一つの卓上版にして、ほかの学校に配らせてもらったりしています。

そして、今年、その「にげろ！あにまるず」の続編、「かいけつ！あにまるず」をつくりました。

「かいけつ！あにまるず」では、「にげろ！あにまるず」で避難した体育館から自分の家に帰るまでの避難所でのいろんな問題をチームで解決していくゲームとなっています。

○**兵庫県立明石南高等学校3** 明石南高校は、震災の2年後から3月にボランティア部が、他校との合同で東北でのボランティアに参加していました。2015年に合同で実施していた高校が東北ボランティアを中止したため、この年からMRDPとボランティア部が合同で実施することになりました。

主な内容は、当時にまだ残っていた2つの平成の仮設住宅での交流とワカメ漁の手伝いです。2017年には、地元の宮城県志津川高校との交流が実現しました。

その後、ボランティア部の部員が少なくなり、2018年からMRDP単独のボランティアとなりました。

志津川高校との交流が深まり、これからというときに、新型コロナウイルスが流行し、2020年のボランティアは、やむを得ず中止となってしまいました。

私たちが行った際には、いまだに復旧できていないとは言える状態ではありませんでした。ですが、地域の方との交流会では、皆さんが笑顔で応えてくださり、私たちの活動で、そういった笑顔の方が増えるようにしていきたいと考えています。

○**兵庫県立明石南高等学校4** 今年は、新型コロナウイルスの影響で、新学期が6月からということで、活動のスタートも遅れました。残念ながら、校外での活動もできなくなってしまいました。

それでも、今やれることをやっていこうということで、3年生の先輩を中心に、子供向けの動画作成、新しいオリジナルのエプロンシアター「ぐりちゃんたいへんだ！」の制作などをしました。

防災ジュニアリーダー活動報告会は、1年生が中心でプレゼンしました。各年次の防災教育ホームルームも、私たちがプレゼンしました。

今年から正式にメンバー入りした災害メモリアルアクションKOB Eの報告会にも参加しました。

そして、めいなん防災ジュニアリーダーMRDPがスタートして8年目に、防災甲子園で今年の特別企画賞を受賞することができました。先輩たちが休校中に取り組んだものが評価されました。

来年は、どうなるかわかりません。しかし、新型コロナウイルスが落ち着いたら、今までどおりの活動を再開したいです。特に、先輩たちがつくり上げたオリジナルゲームを広めていくことで、地域の防災意識を高めたいです。

また、他校との交流を深めていきながら、さらに交流する学校を増やしていけたらいいと思います。

御清聴ありがとうございました。

滋賀県立彦根東高等学校



滋賀の高校生が震災を学ぶ

= 福島県のホープツーリズムを利用した河瀬高校の取り組み =

滋賀県立彦根東高等学校新聞部「福島をつなぐ」取材班

災害メモリアルアクションKOBÉ報告会 2021,1,9

はじめに

昨年度のまとめとして

- ・滋賀でも他人事でないという意識はあるが、防災への行動につながらない。
 - ・過去の教訓が伝われば、活かそうという意識を持ってもらえる。
- との結論を得た。

では、どう伝えるか。それを、福島県の取り組みをもとに、考えていきたい。

彦根東高校新聞部が考えたこと

- 第一段階：「震災を学ぶ」方法を取材する
滋賀県立河瀬高校が福島のホープツーリズムの取り組みを活用した研修会を実施するので、それを取材する。→何が得られるか
- 第二段階：「震災を学ぶ」方法を考える
福島での学びが有効なら、滋賀からより近い神戸を学びの場とすることはできないか。

まずは、震災を学ぶことの有効性を確認して、次の「どう学ぶか」につなげてゆく。

福島取材

河瀬高校研修期間11月21日～23日のうち、2日・23日を取材。

富岡漁港・富岡小中学校での研修を経て、振り返り学習を実施したあとの参加者へのインタビューで、河瀬高校のみなさんの気づきや学びの内容を確認する。



▲河瀬高校研修の様子(2020,11,22)



河瀬高校生の声

- ・身の回りの防災について積極的に考えていきたい
- ・自分が伝えていくことが福島の方々のためにできること
- ・福島のイメージと実際の福島はまったく違って驚いた

実際に現地で「震災を学ぶ」ことが、震災を我が事としてとらえることにつながり、被災地への理解と防災意識の向上につながっている。

まとめ

取材をした私たちも、福島を実際に訪れて、いろんなことを知った。実地で学ぶことの大切さを確認できたので、第二段階である「神戸」で学ぶ方法を探していきたい。

まずは震災を継続して伝え、あわせて「どう学ぶか」「何が学べるか」を探していく。



←取材をまとめた12月号の紙面
↓紙面の中の河瀬高校生の声

身の回りの防災考えたい

震災について今まで全く知らなかったことをたくさん知って、正直混乱している。衝撃的だったこともたくさんあった。滋賀に帰ってから、学校の防災について考えたり地域のハザードマップを見たりして身の回りの防災について積極的に考えていきたいと思った。

北山 柚樹 君

○**滋賀県立彦根東高等学校 1** 県立彦根東高等学校新聞部の前川萌愛です。本日は、オンラインでの参加となってしまいましたが、発表の機会をありがとうございます。

新聞部には、東日本大震災以来、先輩方が取材をしてこられた特集「福島をつなぐ」という企画があり、私たちも受け継いでいます。この企画を続けていく中で、災害の現実を受け止め学ぶことが、これから起こる災害を捉えることに大切だということに気づきました。高校生が震災を学ぶことについて、滋賀県立河瀬高校の取組を取材しました。

昨年度の災害メモリアルアクションでは、滋賀でも他人事ではないという意識はあるが、防災の行動につながられていない。過去の教訓が伝われば、生かしていこうという意識を持ってもらえる。伝え続けないと忘れ去られるという、3点のことをまとめとして取り上げました。

では、神戸や福島の教訓をどう伝えるのか、そのヒントが河瀬高校の取組にあると考えました。

福島県では、ホープツーリズムの推進に力を入れておられます。そのホームページには、以下のようなことが書かれています。

「福島の『ありのままの姿（光と影）』と、前例のない困難な状況の中でも『復興に向け挑戦し続ける福島の人々との対話』を通したインプット。自分の目と耳で見聞きした福島の状況を踏まえ『震災・原発事故の教訓を自分事として未来にどう活かすか』を考えるアウトプット。福島を訪れて感じる希望は、参加者自身の『明日への原動力』となり、成長へと繋がります。」、過去の震災を受け止め、それをどう生かすかを考える、

これは新聞部が大切だと考えたことに一致します。

それで、まず第1段階として、福島のホープツーリズムを河瀬高校の研修に同行して、取材しました。

震災を学ぶことが、本当に私たち高校生の気づきにつながるかを確認したいと思いました。あわせて、私たち自身が現地取材することによって、何を感じるかを体験したいと思いました。

次に、震災を学ぶことが有意義であるなら、滋賀から遠い福島だけでなく、より近い被災地である神戸から学ぶ方法を探したいと思いました。

河瀬高校では、福島のホープツーリズムの企画に沿って、11月21日から23日の2泊3日で研修をされました。主な研修場所は、東日本大震災・原子力災害伝承館、浪江町、富岡町などの各施設です。

このうち、私たちは、11月22日と23日に河瀬高校の富岡漁港や富岡町の教育長さんによる講義の研修の様子やまとめのワークショップを取材しました。あわせて、原子力災害伝承館や、ふたば未来学園高校を新聞部独自に取材しました。

スライドに映っている写真は、河瀬高校の皆さんが富岡漁港で釣り船の船長さんからお話を聞かれているときのものです。

河瀬高校が研修し、私たちも取材した原子力災害伝承館は、昨年の9月に開館したばかりの施設で、災害被害の中の特に原子力災害について伝承するためのものです。

2日目は、ふたば未来学園高校内に地域の人たちも集まることができるカフェを運営する高校生を取材しました。先日は、菅首相が訪れてニュースになりました。





河瀬高校での研修の様子です。

河瀬高校では、15名の希望者が、この研修会に参加されました。振り返りのワークショップでは、3つの班に分かれ、熱心に議論をされていました。

これは、私たちが独自に取材したふたば未来学園高校の様子です。

福島県の太平洋側のふたば未来学園高校のカフェは、社会起業部が部活動として経営されています。福島県の太平洋側の数校が、震災を機にふたば未来学園高校に統合されました。福島県の浜通り地域は、まだまだ人が少なく、この高校が地域の注目となることを期待されています。

あわせて、福島県浜通りにある相馬高校の高校新聞を指導されていた先生に取材し、伝い続けることについてのお考えを伺いました。

○滋賀県立彦根東高等学校 2

これらの取材をまとめたものを12月号の特集として記事にしました。研修に参加した河瀬高校の皆さんにインタビューをし、福島がなぜホープツーリズムに力を入れるのかを、福島県の観光交流課の方やコーディネーターの方に伺いました。

観光交流課の方は、被災地を実際に見て、感じて、考えることが、本当に復興に向けての第一歩だとお話されました。

コーディネーターの方は、このホープツーリズムでは、光と影から未来が見えるツアーだと信じていると話されました。

また、研修に参加した河瀬高校の皆さんのインタビューも掲載しました。そこからは、震災を学ぶことで、いろいろな気づきがあったことが分かります。幾

つか紹介します。

「身の回りの防災について積極的に考えていきたいと思った」、この方は、防災の意識の向上が見て取れます。

「自分が伝えていくことが福島の方々のためにできることであると強く思う」、この方は、震災の記憶を伝えていくことが大切なのだとことを気づかれています。

「福島のイメージと実際の福島は全く違っていて、驚いた」、この方は、実際に現地に行ってみることで、今まで持っていたイメージとの違いに気がつかれました。

私たち自身も、今回、初めて震災被害に遭われた現地を取材させていただきました。そこで感じたことを、3名のことをそれぞれお話しします。

「現地で感じる福島の『熱量』」、2年 前川 萌愛。

私は、現地の人たちの話を聞いて、地元を盛り上げようと、風評被害を乗り越えようとする強い気持ち、強い思い、熱意を感じました。そのような人たちの思いを新聞で伝えることができたらいいなと思いました。

「福島の現状を伝えることの大切さ」、2年 村木 春桜。

私は、福島に行ったことで、高校新聞が福島の現状を発信することの意義を考えるようになりました。福島は復興に向かって前進し続けていますが、その一方で、残しておかなければいけない震災の教訓・記憶もあります。その両方の側面を若い世代に発信することは、きっとこれからの社会において重要な意味を持つと思いました。

「復興の定義の曖昧さ」、1年 湯浅 完。

私たち取材する側は、人によって復興したという実感は異なるということを頭に置いて、細心の注意を払わなければいけないということが分かりました。復興のように曖昧なものを、そのまま伝えるということが大切だと思います。

これらのことを合わせて、まとめの記事にしました。

被災地のことを考えることは、社会全体のプラスになることだということが分かりました。

実際に震災の被害に遭われたところで生の声に触れることは、私たち高校生にとって大切なことだと、河瀬高校の皆さんの姿を見て、感じる事ができました。そこから、滋賀県の高校生が震災を学ぶ方法について考えていくべきだと確信しました。

震災を学ぶには、テキストを読んだり講演を聞いたりすることも有効ですが、併せて実際に被害に遭われた場所に足を運ぶことで、印象深くなります。滋賀にとって福島は遠く、もっと身近な神戸に注目すべきだと思います。

阪神・淡路大震災から25年がたっていますが、この記憶をとどめようとする活動は、この災害メモリアルアクションの活動をはじめ神戸の様々なところで行われています。このような活動の重要性を、今回の取材で強く感じました。

神戸には、人と防災未来センターなどの施設があります。このような施設を利用することで、防災の意識を高めることができると思います。

しかし、私たちが周りのクラスメートに「人と防災未来センターを知っているか」と聞いたところ、「知っている」と答えた人が23人、「知らない」と答えた人が253人でした。

また、「阪神・淡路大震災を知っているか」と聞いたところ、「知っている」と答えた人は277人、「知らない」と答えた人が2人でした。

このことから、阪神・淡路大震災を知っている人は多いが、人と防災未来センターを知っている人は少ないということが分かりました。

人と防災未来センターを活用することで、阪神・淡路大震災を学ぶことができると考えます。なので、まずは人と防災未来センターのような施設を滋賀の高校生にも知ってもらうことから始めるべきだと思います。

本来ならば、人と防災未来センターを改めて取材し、また、この災害メモリアルアクションKOB Eに参加しておられる学校などから何が学べるか、何をどう学ぶかを検討する予定でしたが、コロナ禍で移動しにくい状況でしたので、今後につなげていきたいと思います。

今回の取材活動を通して、福島を伝えること、そして神戸で学ぶことの大切さを一層感じる事ができました。

まずは、この3月に福島を訪ねて、私たち新聞部が10年間続けてきた福島の取材を継続し、伝え続けることの大切さを示していきたいと考えています。

以上で、発表を終わります。御清聴ありがとうございます。



左上 富岡小中学校での富岡町教育長の講話

左下・上 振り返り学習の様子

国立明石工業高等専門学校

D-PRO135° (明石高専防災団) 地域連携チーム

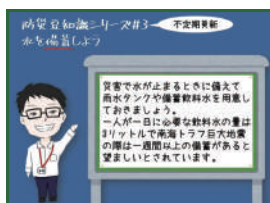


D-PRO135°

明石高専防災団 地域連携班

SNSでの活動 Activities on SNS

今年度は、Instagramへ活動を広げるなど、コロナ禍でもできる活動を重視した。
中でも、地震が起きたら電気は何日で復旧するか?のようにクイズ形式で災害への備えに役立つさまざまな知識を発信する「防災豆知識」や「防災食を使ったアレンジレシピ」など今までになかった広い視点での活動を展開した。



また、さまざまな活動をオンライン化することも重視した。部の定例会や他団体とのコミュニケーションなどもオンライン上で行うことで、活動の幅を広げることを目指した。

with コロナの活動 with Corona Activities

「防災」をテーマにしたD-PRO135°にとって、未曾有の新型コロナウイルス流行という「災害」に対してどう立ち向かうかを考えることも活動のひとつであると考えた。そこで、コロナ対策の手立てとして、過去の経験から得られるものもあると考え、世界的なパンデミックであった2009年のインフルエンザパンデミック時、神戸市危機管理対策室長であった櫻井誠一氏にインタビューを行った。こちらのインタビュー内容も「防災新聞・避難所運営」内にあるQRコードより閲覧できるのでぜひアクセスして欲しい。

HPリニューアル HP renewal

D-PRO135°の5周年を記念してHPのリニューアルを行った。5年間の軌跡などを記したページなどを作成した。同時にお問い合わせ用のフォームなどを作成し、その結果さまざまなご依頼をいただき、神戸大附属小学校へのお出前授業やON PAPERさまで風水害ゲームchoiseの体験会などを行うことができた。今後もさまざまな方面へ活動を展開したいと考えているので、ぜひご依頼をいただければと思う。

防災新聞・避難所運営 Disaster prevention Newspaper

コロナ禍での避難所運営の課題解決の糸口を見出すため、2009年の新型インフルエンザ流行の事例からフィードバックを得ようと考えた。その活動の一環として阪神淡路大震災時、神戸市鷹取中学校の教員で、避難所運営者であった中溝茂雄氏へインタビューを行った。結果として、避難所内でもインフルエンザ流行が散見されたという事実がはっきりとわかり、そこから「避難所内での感染症対策」や「不足していた物品」など詳細な当時の様子を知ることができた。



また、このインタビューと「with コロナの活動」内の櫻井氏へのインタビューを取りまとめた防災新聞を作成した。取材の詳細な内容などを掲載しているが、その他議事録や取材風景なども掲載しているため、興味のある方はぜひアクセスして欲しい。

議事録・取材風景



神戸大学附属小学校出前授業



ON PAPER さまでの Choice 体験会



2015年夏に結成された明石高専防災団D-PRO135°は有志の学生が集い日々さまざまな防災への関わり方を見つけるために日々活動しています。

○国立明石工業高等専門学校1 こんにちは。明石高専 D-PRO135° 3年生の山森陽太です。本日も、地域・感染症班とゲーム開発班の2つに分けて発表させていただきます。よろしくお願いします。

それでは、まず地域・感染症班の発表を始めたいと思います。

本日は、私たち地域・感染症班の2020年度1年間を通した活動について発表させていただきます。

2020年度の活動は、主にSNSによる防災情報発信、防災新聞の作成、神戸大学附属小学校での防災講座の開催、D-PRO135° 初となるビジネスパーソン向け防災イベントの開催の主に4つです。

今年は、新型コロナウイルス感染症の関係で、活動の前半をオンライン上で行ったこともあり、行えておりませんが、例年であれば、これに加え学校付近の古い町並みが多く残る東二見地区での感震ブレイカーの取付けや防災イベントなどを行います。

それでは、まずSNSによる防災情報発信についてです。

この活動は、オンラインでの活動中に実際にイベントが行えない中で、どのように防災活動を行うかという話合いから生まれた、今年から新たに生まれたプロジェクトです。

大災害などの経験がない世代の私たちと同世代の若者に防災に関心を持ってもらうきっかけをつくることを目的としており、そのため、私たちになじみの深いInstagramにて、防災についての豆知識など、分かりやすく、ためになるような情報を発信しています。現在も、不定期ではあるんですが、防災情報の更新などを行っています。今までは、情報の投稿のみを行っていたんですが、これからはSNSの機能をフル活用して情報の発信を行っていきます。

Instagramのストーリー機能とは、通常の投稿とは別に、より日常的な写真や動画の投稿が行える機能のことです。

Instagramの通常の投稿では、逆時系列なので、順番に表示されるのですが、ストーリー機能は画面の上部と、別枠に表示されるため、とりあえずストーリーだけは欠かさずにチェックしているという方も多いのではないのでしょうか。

このように、さらにカジュアルな方法で防災情報を小まめに少しずつ発信することにより、より防災に興味を持ってもらえるきっかけを増やすことを目的としています。

これについては、ストーリー機能を使用することによるフォロワー数の変化などを年度内に検証する予定です。

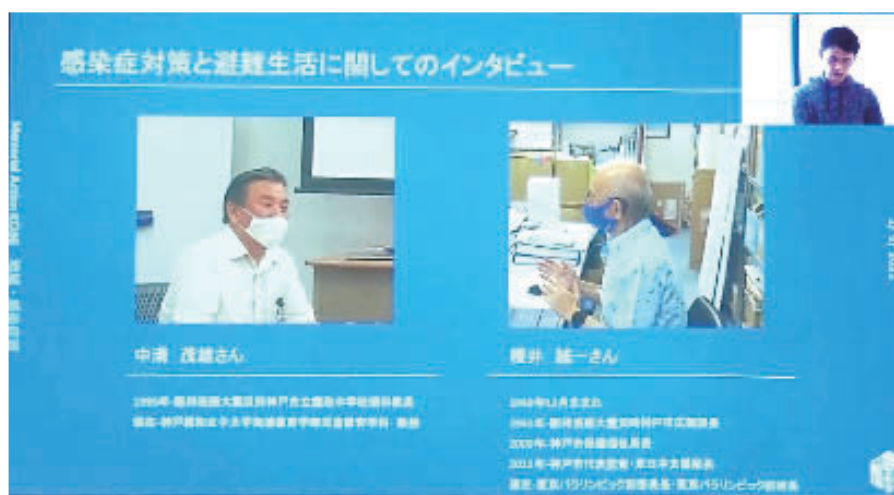
さらに、チャット機能を用い、防災団体との横のつながり、コミュニケーションを増やしていくことも計画しております。

現在も、幾つかの防災団体さんがアカウントをフォローしてくださっていますが、防災情報を広く発信していくことで、兵庫県内から日本中の離れた場所の防災団体まで、チャット機能を用い、比較的簡単に意見交換が行えるのではないかと考えております。

次に、この「グラッと来たら、スイッチ切ってプラグ抜く」という投稿についてなのですが、この投稿に対して、地震が発生して、まだ揺れている間に、プラグを抜いたりスイッチを切ったりするのですかという質問が寄せられております。

この投稿は、大規模な地震などに伴う停電の後に、電子機器、電熱機器などに再び通電することによって起こる通電火災を防止するためのものですが、揺れている最中は、まず身の安全を確保することが必要なた





め、スイッチを切ったりプラグを抜いたりするのは、揺れが収まってから行います。

このように、SNS上では、気軽に防災の疑問について質問することが可能で、それに対して簡単に回答を返すこともできます。

これからは、このような防災に対する質問・疑問などにも答えていきます。

このように、インスタグラムでの防災活動では、若者の防災意識向上や、今までように現地で直接会ってコミュニケーションをするようなオフラインの防災活動とはまた違った新たな防災ツールとしての利用ができることなどのメリットがあります。

逆に、インスタグラムでの防災活動には、そもそもアプリケーションの使い方が分からないという世代への普及が難しいことや、若者に興味を持ってもらえるような防災の情報や防災の情報の伝え方を工夫することが必要であるなどのデメリットがあることも考えられますが、これらについては、これからの私たちのSNS上での活動を通じて、対処方法・改善方法を模索していきたいと考えております。

それでは、皆さんお待ちかねのフォロワー数についての報告です。現在、フォロワー数は、63人です。メモリアルアクション中間報告会での皆さんの御協力もあり、フォロワー数は以前よりも大きく増加したのですが、今年度の目標である年内フォロワー数100人までには、あと37人にフォロワーしてもらうことが必要です。

前回の中間報告会からまだフォロワーされていないよという方は、ぜひ私たちのアカウントのフォローをしていただいて、私たちの防災活動への御協力をよろしくお願いいたします。

次に、感染症対策と避難生活に関するインタビューについてです。

私たちは、阪神・淡路大震災の際に実際に避難所の運営をされていた中溝さんと阪神・淡路大震災の際に

は、災害対策本部2009年新型インフルエンザ流行時には、神戸市保健福祉局長として御活躍されていた櫻井さんにお話を伺いました。

中溝さんには、避難所運営をする上での避難者への対応や物資の管理、避難所でのルールなど、櫻井さんには、阪神・淡路大震災の発災時、新型インフルエンザ流行時のそれぞれの行政の対応、制度上の課題など、それぞれ違った視点から貴重なお話を伺いました。

これらのインタビューで得られた情報を基に、その情報を広く伝えるべく、防災新聞を作成しました。

作成した防災新聞の詳しい内容や取材の内容については、D-PRO135° 公式ホームページに掲載しているため、ぜひそちらを御覧ください。

また、神戸大学附属小学校で防災講座を行いました。この活動では、4年間限定ではありましたが、オンラインツールを防災講座では初めて使用し、家から受ける防災講座も試みました。

防災講座の会場の映し方や音質の改善など、まだ多くの課題が残されているんですが、新たな防災講座の形への最初のステップを踏み出すことができたと思います。

最後に、ON PAPER での防災イベントについてです。

ON PAPER 様の御協力もあり、D-PRO135° 初となるビジネスパーソンを対象としたゲームイベントを開催しました。ここでは、D-PRO135° の新ゲームである風水害についてのゲーム「Choice」を使用しました。

防災ゲームの「Choice」については、詳しくはD-PRO135° ゲーム開発班の発表を御覧ください。

これからの活動では、イレギュラーな今年の活動の中から新たに生まれた活動の問題点などを改善しつつ、さらに活動の範囲をオンライン・オフラインの両方で拡大していきたいと思います。

御視聴ありがとうございました。

国立明石工業高等専門学校

D-PRO135° (明石高専防災団) 開発チーム

2020年度の活動

- ・「Choice」の改良
- ・「チャレンジ！オンライン」の開発

D-PRO135° 明石高専防災団 開発班



今までの活動 Past Activities

私たち、D-PRO135° は、「実は防災って楽しい」をテーマに、防災にかかわるきっかけづくりをゲームを通して作ってきました。

防災ボードゲーム「RESQ」は「つくる、あそぶ、まなぶ」をテーマに、地震や共助について体感的に学べるゲームです。



新たな活動 New Activities

Choice の作成・改良



Choice は防災ゲームの地図作成システム RESQ+ を活用した自由に地図を変えられるあたらしい風水害ゲームです。このゲームを行うことで予兆から災害が起こるメカニズムを知り、災害発生を自分で判断する力を養うことができますようになります。

まだ目の目をほとんど見ていないこのゲームですが、今後風水害ゲームとして主に小さいお子さんに飽きずに遊んでもらい、自分の住んでいる地域ではどのあたりでどのような災害が起こるか一度自分自身で調べてもらえうきっかけがうまれたらいいと思っています。

改善した点

1. 普段の日常の中で災害が起こる ... より身近に感じることができる
2. ゲーム性の向上 ... 現実にはない要素を含むカードで飽き防止
3. 所要時間の短縮 ... 所要時間が 15 分になりより気軽に遊べるようになった



Choice

新たな活動 New Activities

チャレンジ！のオンライン開催

今年は淡路市の AIC ICT シンポジウムでクイズ形式の「チャレンジ！オンライン」を zoom を用いて実施しました。

講師の先生も交えたゲームの実地で、楽しく学ぶことができたという意見をいただきました。コロナ禍による活動制限の中、私たちにできる防災発信の形を模索しています。

遊び方 (今回の淡路島ワークショップのために考案)

1. 概要説明とグループ分け
2. お題についてグループごとに話し合い、意見をまとめる
3. 全体でハプニングが発生
4. ハプニングに対してどれだけ対策ができていたかによって点数を振り分ける
5. チャレンジがある場合リーダーが発言
6. もっとも点数の高かったグループの勝ち



情報発信 Information



○国立明石工業高等専門学校2 それでは、D-PRO135°
ゲーム開発班の発表を始めさせていただきたいと思
います。

まず、ゲーム開発班が、今年、2020年度に行った活
動は、この2種類です。「Choice」の改良と「チャレ
ンジ！オンライン」の開発です。

まず、「Choice」の改善について、お話をしてい
きたいと思います。

「Choice」というのは、どんなゲームかと言うと、
風水害ゲームなんですけど、自分の住むまちとか、例
えばこの「Choice」をどこかのイベントで使いたいとか、
そういう依頼があったら、その依頼のあった地域に応
じてマップをつくり変えて「Choice」を遊ぶことがで
きます。

また、その遊ぶときには、ちゃんとどこで災害が起
こるかというのを、その地域のハザードマップを基に
してマップをつくることができます。

また、この「Choice」の最大の特徴として、例えば
土砂崩れとか、そういう災害が起こるんですが、その
災害の前に予兆というのが発生します。予兆を基に、
どこでどんな災害が起こるかというのを自分で判断を
して、その災害から身を守るという力を養うというの
が、この「Choice」です。

これはメインではないんですが、実際に持っている、
自分がふだんから持ち歩いているとか、家に置いてい
る備蓄品というのがゲーム内で活躍をします。

この「Choice」なんですけど、この「RESQ」とか
「RESQライト版」とかと比べますと、やはり行う
ゲームをする地域に応じてマップを変えろという点
だったりとか、ゲーム性を改善してゲーム性を向上さ
せたんですが、ゲーム性を向上させたという点で、「R
ESQ」とか「RESQライト版」よりも地域性があっ

て、簡単なゲームになっています。

「Choice」の遊び方なんですけど、「Choice」の大ま
かな流れとしましては、さいころを振ってマップを移
動していきながらミッションを達成していきます。

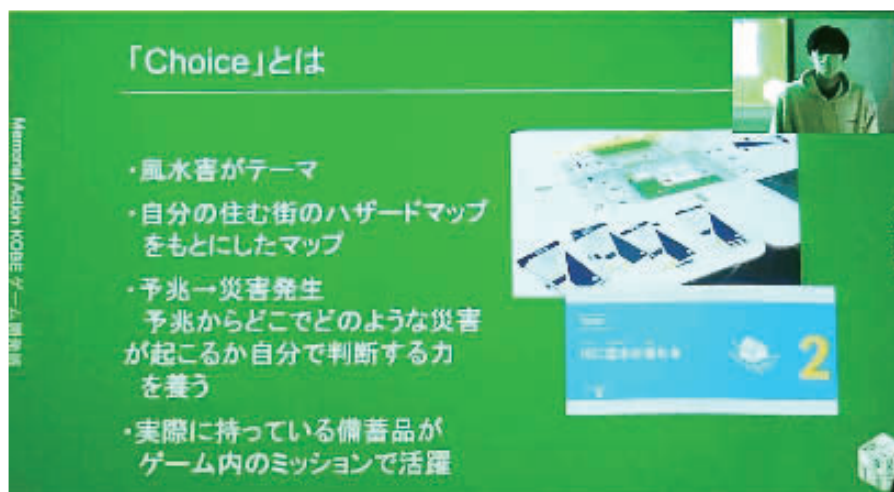
また、このゲームを進めるうちに災害の前兆が起
こって、この前兆が重なったときに災害が発生する
というふうな流れになっています。

また、この「Choice」に関して、ポイントを多く取
った人が勝ちというゲームなんですけど、ポイントを獲得
する手段としては、ミッションの達成、これは、先ほ
どありました、この青いカードなんですけど、こうい
うミッションを達成したら、例えばこれだったら4ポ
イント獲得できます。こういったふうに、ミッションを
達成して獲得したポイントと、発災したときにちゃん
と安全な場所にいたか、それから災害に残念ながら巻
き込まれてしまったかというのと、この備蓄している
物品の数によって、ポイントを獲得することができます。
これで、ポイントが多い人が勝つというふうなの
が、この「Choice」の大まかな流れになります。

もともとは、こういうカード、例えば「ハイテク乗
り物」とか、こういうカードというのは、一番最初
「Choice」の第1版、初版ができたときはなかったん
ですが、いろいろ交流から、面白くないとか、中身が
ないとか、デザインだけとか、ぼろかすに言われて、
その言われた課題とかを基に解決していった結果、例
えばこういうふうな現実にはない要素を入れることで
ゲーム性を高めるとか、そういうふうな工夫を、改善
をしています。

具体的に「Choice」、どうやって遊んでいくかとい
うことで、説明をしていきたいと思います。

まず、アイテムカードというのを配っていきます。
このアイテムカードなんですけど、御覧のとおり、先ほ



ど申し上げたアイテムカードです。現実にはない要素なんです、例えばこの後、発生する災害とか、そういうときに、どうしてもやばいというときに助けてくれるかもしれないアイテムカードなんで、これはちゃんとどういう内容のアイテムカードなのかというのは、ちゃんと確認をしておくようにしましょう。

続きまして、備蓄チェックシートに記入をします。これは、後で使います。

続きまして、参加者全員がそれぞれさいころを振って、2つさいころを振ってもらうんですが、出た目の和の、例えばここにビル3というふうに書いているんですが、このビル3は、例えばさいころを振って出た目の和が3であれば、ここのビル3のところをこまを置いて、そこがスタート地点になるというふうな感じで、スタート地点を決めます。

続きまして、ミッションカードとアクシデントカード、束があるんですが、この束を混ぜます。

具体的な内容を説明しますと、このアクシデントカードというのは、左の黒いカードなんです、これはこのミッションカードの中でいきなり発生するんですが、例えば左上だったら、川に架かる橋が通行止めというふうになっていて、川に架かる橋が通行止めならば、そのままなんですけれども、こういうミッションカードが出てきます。これは突然発生するんで、これは予兆もなくいきなり発生をするんで、巻き込まれた場合は、一番最初に申し上げたアイテムカードで復活をすることになりますね。これ、どうしても駄目なときは、残念ながら失格になってしまうんですが、そういうアクシデントカードと、このミッションカードですね、これで完成と、この話は後でしますが、アクシデントカードの束を並べます。

これまでが準備で、ここからやっとゲームが始まる

んですが、まずさいころを振る順番を決めて、ゲームスタートです。

アクシデントカードの束から、このミッションカードを1枚引いて、さいころ振って、これは、さいころ2個を振って、出た目の和だけマップの中を進んでいって、ミッションを達成していきます。

これは、例えばこのカードで言うと、ターン制限2と書いてあるんで、2ターン以内に消防署に行けば4点もらえるというふうな流れになっています。

このミッションカードなんです、どんどんミッションをクリアしながら、基本的には「R E S Q」と同じように、ミッションを動きながらクリアしていくという形なんです、その中でも、この状況カード、これ、左の赤いカードなんです、状況カードというのがありまして、これは、一番最初は高齢者と避難準備というふうな段階なんです、これがターンを重ねるごとにどんどん段階が上がっていって、この左の状況ですね、一番マックスの9ターン以降になった場合は、この避難指示というルールになります。

この避難指示になったら、この後は、ここから先にさいころを2つ普通に振ってもらって、そこの和が4の倍数であったら、左のような、右の前兆カードというのを引いてもらいます。この4の倍数が出て、前兆カードを引くということを、もう一回、つまり2回、4の倍数が引かれたら、もうその瞬間に災害が発生します。

どこで災害が発生するかと言うと、このとおり、この災害が発生する場所は、基本的にそれぞれの自治体のハザードマップを基に考えるんですが、この前兆カードを2枚引かれたときに、ここの数字の和の数で、このような災害が発生します。

その後、災害に巻き込まれた場合は、前兆とか、日



頃、ハザードマップとかを見ていれば、どの辺りで災害が起こるかというのは、大体見当がつくということで、日頃から、そういうようなチェックをしておいてくださいねという意味でも、この避難に失敗した場合はマイナス5点となります。

これでゲーム終了なのですが、この後、一番最後に、ゲームの準備の段階で書いてもらった備蓄チェックシートにチェックが5個ついていたら、5個当たり1点ずつ加点をしていて、最後、それを全部加味したときに、一番点数の高かった人が勝利になります。これが「Choice」のルールです。

この「Choice」なのですが、既存の地震の防災ゲーム「RE SQ」と、この「Choice」の2本で、さらに今後の防災活動の幅を広げていければなというふうに考えております。

また、この「Choice」をさらに砕いて分かりやすくした、本当に子供向けのゲーム、ボードゲームですね、「Choice」バージョン2.0というのも構想中ですので、乞う御期待ということです。

以上が、「Choice」の改善についてです。

続きまして、「チャレンジ！オンライン」についてです。

これは、既存の避難所運営ゲーム「チャレンジ！」というのをオンラインで行うというふうなものになっております。昨今、コロナ禍で、防災活動、防災のイベントとかも、オンライン参加というのがよくあると思うんですが、そういうところでも防災ゲームができるようにということで、この「チャレンジ！オンライン」をつくるという取組をさせていただいております。

これは、淡路市で行いました防災クイズ「チャレンジ！」とか、神戸大学附属小学校での「チャレンジ！」とか、この辺りから得られた課題とか意見というところを基にして、この「チャレンジ！オンライン」をどういうふうにするかというのを考えていて、開発をしたという次第でございます。

これは、「チャレンジ！オンライン」で使うスライドの一部になっています。

遊び方とか順序は、以下のとおりなのですが、これはオンラインなので、オンラインならではの特征として、まず、ここにちょっと書いていないんですが、1の前に、「チャレンジ！オンライン」、集まって始まった後に、アイスブレイクの時間というのを設けております。

また、この5番に、チャレンジがある場合は、これは「チャレンジ！」というのは、グループに分かれて

話し合うというふうな内容のゲームなのですが、グループで話し合った後、グループの人たちが司会者に対して発言をするというふうな場面があるんですが、そのときは、やはりオンラインですので、代表者1人が代表して発言をするというふうにしたところなので、このオンライン、Zoomを使うんですが、オンラインならではのルールというのも行っております。

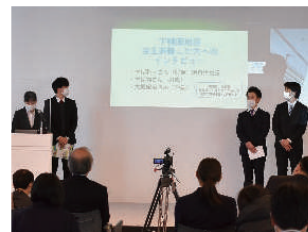
例えば、アイスブレイクをやっているのはなぜかというと、これ、Zoomを使うので、Zoomの機能自体に慣れてもらう必要があるんで、慣れるという意味でもアイスブレイクを行うということで、代表が発言するというのは、何人もの人がばっと話したら、普通に聞き取れないということがあるんで、リーダーが代表して発言すると。これらの点が、オンラインならではのルールとして、既存の「チャレンジ！」につけ加えて、ただ、この既存のももとの「チャレンジ！」とほとんど変わらないようなルールで遊んでいけるというふうに配慮してつくりました。

まだ、これは日の目を浴びていないやつなのですが、今後の活動でどんどん使っていければなというふうに考えております。

以上2点が、2020年度のゲーム開発班の活動でした。御清聴ありがとうございました。

神戸学院大学

現代社会学部 社会防災学科 安富ゼミ



災害メモリアルアクションKOBЕ 2021 「丹波豪雨災害について」

神戸学院大学 / 現代社会学部 / 社会防災学科 / 安富ゼミ



インタビュー

昨年までは、「阪神淡路大震災の教訓がきちんと伝わっているか」ということをテーマに様々な分野の方にインタビューを行い新聞を作成しましたが、今年度は、2014年に発生した丹波豪雨災害の避難事例に注目して研究を進めました。実際に現地を訪れ、災害当時の自治会長・市役所職員・住民の方々にインタビューを行いました。



インタビューにご協力いただいた方々、ありがとうございました！



3度現地に訪問し、自治会長・市役所職員の方には、どのような対策をしていたのか・どのようにして被害を軽減したのかなどについて伺いました。

また住民の方々には、どのようにして避難したのか？ 助けられたのかについて伺いました。

さらには、実際に被害が遭った川や道路を自分たちの目で確認し、災害に対する理解を深めました。

現地調査結果

私たちは、みなさんのお話を録音し、話言葉そのまま文字に書き起こすということをしました。当地区では犠牲者を1人出していました。当地区の犠牲者がなぜ1人だったのかを調査しました。

その結果、現代社会において不足している地域間、隣人との交流を日頃から深めておくことが大切であると知ることが出来ました。当地区では、交流を深めるために地域でイベントを催したり、災害時の対策について話し合う場を設けています。

その他にも、各家庭に行政防災無線を設置するなどの防災を行なっています。今回学んだことを私たちが伝聞していき、この先の災害で被害が出ないよう努めたいです。



Kobegakuin University

神戸学院大学

-----Member-----

教授 安富 信

3年 楠海斗 釜谷颯汰 大田明日香
小林千香 難波巧 池谷柊斗 豎山智也
山田将大 赤松伸哉 佐々井将人 張嘉豪
野口春 佐藤菜都 北脇敬吾

ポートアイランドキャンパス 〒650-8586 兵庫県神戸市中央区港島1-1-3

☎078-974-1551

○神戸学院大学1 それでは、神戸学院大学の発表をしたいと思います。

災害時の避難の在り方を考えるということで、2014年8月、丹波市豪雨災害を基に見ていきたいと思います。

2014年8月の豪雨では、主に広島県に甚大な被害があったとしてメディアに取り上げられていました。

次に、同じように被害があった丹波市と広島県の被害を比較してみると、雨量や土砂災害件数ともにほぼ同じ値であり、被害の規模はあまり変わらない結果となりました。しかし、丹波市の死者数・負傷者数をメディアに取り上げられていた地域に比べるとかなり少ないことから、どのような防災対策をしているのかということ調査しました。

次は、2014年8月豪雨についてです。この豪雨は、2014年の7月30日から8月26日にかけて、台風12号、11号や、前線や暖気流によって発生しました。

また、この豪雨による被害としては、死者が84人、建物の全壊が200件以上であり、5つの地域では、平常の2倍以上の降水量があり、全国17地点で8月度の最大降水量の1位を更新するほどでした。

そして、今回、実際に丹波へ行き、当時の自治会長さんから伺った話と発令された警報などを照らし合わせながら、どのような状況であったかを、警報が発令される前日の8月15日から17日までをまとめました。

8月15日から天気予報を見て、様子がおかしいと感じていたそうです。

そして、夕方の5時頃から、四役と言われる自治会長、副会長、農業役員長、副役員長で集まり、話をしていました。

そのときには、既に雨は降っており、山を見て、様子がおかしいと感じ、泥臭さや、今までに聞いたことのない音などがしていたが、何が起きているか分からなかったそうです。

そして、次の日の夜明けから、この地域の主要道路である県道に水が流れてきていました。自治会長さんは、鴨阪地区の下の方から順に車で様子を見て回っていたが、飛沫と小石とで車が前に進まないほどだったそうです。

また、県道の横に流れている深さが5メートルある前山川が土石で埋まっていて、県道と前山川の境が分からないほどの土石流や濁り水が流れてきていました。

この写真が、前山川になります。この左の田んぼの横に県道があるので、そこまで水があふれていました。



川の中に大きな石が幾つもあると思うんですけど、これは当時の土石流によるものだと思うとおっしゃっていました。

そして、15時35分に大雨洪水警報が発令されました。本来、ハザードマップでは、中学校が避難所として指定されていますが、公民館から中学校までの道のりが約4.5キロもあるので、高齢者が多くいる中で避難することは困難であったため、身近である公民館を急遽避難所として、消防団に協力してもらいながら住民に避難を促しました。

水が流れていることで県道が塞がれると逃げ道がなくなってしまうんですが、丹波市が農道をかさ上げしてくれたおかげで、その道を使い避難を行うことができました。

実際に避難した人の家が、目の前で山が崩れたことで流されてしまったということもありました。

夜には電気・水・ガスが止まってしまい、下水は使えたので、トイレはできたそうです。

17日には、深夜の1時15分に丹波市警戒本部を災害対策本部に切り替えました。その後、早朝の3時5分に避難勧告が発令されました。朝、様子を確認すると、雨はましになっていたが、県道にはまだ水が流れてきたといった状況だったそうです。

次は、避難後についてです。

公民館に避難した人は、小学生からお年寄りまでの約20人が約2週間ほどで市営住宅に入れてもらい生活していました。

そして、有志によって復興委員会が立ち上げられて、その中に、元給食センターで働いていた方がいたため、給食センターに頼んでもらい、避難した人の昼食や夕食のパックを容器に入った温かいお弁当を用意してもらいました。そのお弁当も、いつも同じお弁当やという意見もあり、市にも協力してもらい、ほかのお弁当も手配してもらったそうです。

また、お風呂は、山南町にある大浴場に毎日無料で

入らせてもらい、その送り迎えは市が行ってくれたそうです。

○**神戸学院大学2** 次は、実際に被害があった被害者の方にインタビューしました。

被害者の方は、家は山間部近くにあり、山間部から流れてきた水の勢いで家の1階が抜けてしまいました。しかし、2階に被害はなく、垂直避難で2階に避難したそうです。右の写真が、実際の当時の被害の写真で、家の基礎の部分はなくなり、宙ぶらりんのような状況だったそうです。

この状況で雨が収まるのを待つうちに、消防隊に助けられ、避難を開始しました。泥だらけで避難し、本来、避難指定されている中学校には避難せず、公民館に避難したいと訴えたそうです。

災害後、半壊した家からアパートで暮らし、その後、2年間、市島で暮らしました。しかし、生まれたところに住みたいという思いから、家族からの反対もありましたが、災害に遭った自宅と同じ場所に家を再建しました。

次は、地域のつながりの強化についてです。

地域で最も大きなイベントとして多くの住民が集まる毎年8月23日に行われる愛宕山のお宮さんを奉るイベントを開催し、地域のつながりの強化をしています。

このイベントの際に、過去の災害について地域全体で振り返ることを自治会は目標としているが、当時の被災した記憶から、このようなイベントの際は、当時のことを話したくないという意見も多かったそうです。

ボランティアでは、開始当時、ボランティアに来た人と被災者との間でトラブルが幾つか発生していました。この原因として、都市部の災害と違って、地方では、ペット掲示板などの掲載がなく、ボランティアの活動域が曖昧であったことが考えられます。



そこで、自治会は、トラブルを避け、効率のいいボランティアができるように、ボランティア専用窓口とボランティアを誘導する人を採用し、トラブルの減少と円滑なボランティア活動を実現しました。

また、ボランティアの方へ恩恵としてシャワーを設置し、ボランティア後に使用してもらい、ボランティアのひとと地域のつながりも大切にしました。

災害前、災害直後の対策についてです。

鴨阪町は、5年前の豪雨災害の経験もあり、豪雨に対する防災意識が高く、会議のみではなく、各住民の家に防災無線を設置し、避難行動を素早く取れるように対策をしていました。

防災無線を外部に置いていた場合、雨の音や風の音で全く住民に避難を促すことができなかったことが想定されるため、防災無線を各家庭に設置を義務づけることは、今回の災害で大きな意味があったことが分かりました。

また、自治体が災害直後に住民がなるべく避難できるように、独自の判断で公民館を開放したことは、被害を少なくするための判断としてよかったと考えられます。

災害後の対策としては、防災の日集まって、過去の災害を忘れないように、当時の状況などを話し合っているそうです。

また、堰堤と言われる、川水をほかに引いたり、流れを緩やかにするためのダムより、小規模な堤防を6枚設置し、川の水の流れ道をつくりました。

また、市がつくったハザードマップに当時の災害状況を書き、過去の経験から、次に起こり得る災害に対して対策を立てています。

○**神戸学院大学3** 続いて、下鴨阪地区についてです。

私たちは、前回の中間発表後の12月13日に、再び下鴨阪地区にて、当時、自主避難された現自治会長の大槻和人さん、大槻人志さん、大槻昭治さんの3名の方にお話を伺いました。

今回の調査を経て、下鴨阪地区でも、新たに時系列を作成しました。明け方の状況や警報の発令は、鴨阪地区と一緒になんですけれども、この真ん中ら辺の大槻昭治さんは、自宅でテレビを見て笑っていたと書いているところがあるんですけども、9時頃に、昭治さんは、まだこのとき、緊張感を感じていない状態だったと言っていました。

その後、午前0時になり、自治会内の1軒から、自宅横の水路があふれて自宅にも水が入ってきたとの連

絡が入りました。

午前2時に避難勧告が発令され、防災無線にて垂直避難の呼びかけがされました。昭治さんと人志さんの家族と、もう一家族の計3家族で自治会の公民館に避難をしました。

午前3時頃に駐在さんが来て、河川の決壊と土砂崩れの報告が入り、このときには道路はもう土砂で埋め尽くされている状態でした。

そして、午前9時に自衛隊・機動隊の方からの支援が始まりました。

当時の避難状況について、昭治さんと人志さんは、共に避難の準備はしていませんでしたが、避難する際に玄関が開きにくくなっているのは駄目だと思い、ドアは開け放した状態にされていたそうです。

その後、避難することになりましたが、そのときには傘をささず、当時、雷の光がすごくて、その光を頼りに避難をされたそうです。

避難した公民館までは300メートルほどでしたが、避難に30分以上の時間がかかったとのことでした。

その後、昭治さんは公民館で1か月半ほど暮らしたそうです。

インタビューの際に、暗くなかったら避難しなかったかもしれないとおっしゃっていました。これは、当時、道路が浸水して川との境目も分からなくなっていたそうで、そうした被害がもし目で確認できる状況だったら、もう避難を諦めていた可能性があったと話されていました。

こういったことから、明るいうちに避難をしていくことの重要性をすごくおっしゃっていました。

また、経験したことのない規模の被害だったため、うまく危機感を感じることができなかったそうですが、それでもこの地区の方々は、ふだんと様子が違うことから避難の必要性を感じたとあり、この決断が人的被害を抑えられた理由の一つじゃないかなと思います。

このときは、インタビューに訪れて、当時の様子を語ってくれている様子です。

この川が決壊して、道路との境目が分からなくなっていたそうです。

この写真は、大槻昭治さんが当時住んでいた御自宅があった土地です。避難後に、御自宅は土砂によって押し流されてしまいました。奥に見える御自宅は、当時、大槻人志さんが住んでいた御自宅で、昭治さんと人志さんは、現在は別の場所に引っ越していますが、引っ越し先でも隣同士で住まれていて、当時、一緒に



避難されたように、今も助け合って暮らしています。

○神戸学院大学4 被災後の変化として、まず人志さんは、枕元にヘッドライトと靴を置くようにされています。

そして、地域では、毎月28日に集会を開き、特に台風シーズン前は、自治会の集会で会議を行い、対策や注意喚起といった呼びかけを行う対策をされています。

また、防災無線は地区全体に設置され、丹波市1世帯に1基は無償提供されています。日頃から、緊急時のテストも兼ねてJアラートも含んだ行政伝達の定時放送としてされています。

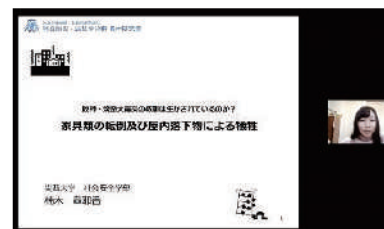
モデル地区としての村づくり活動も、被害を受けた翌年11月から行われています。平成29年9月に地域再生大作戦「がんばる地域」交流・自立応援事業が始まりました。現在は、大学や地域外のNPO等と協働し、災害からの復興を目指し、村づくりに取り組む環境づくりが整いつつある状況です。

そして、これからに向け集落の整備や空き家の再生に取り組み、住民の心を一つに活動していくことが必要とのことでした。

亡くなった1名については、何度も避難の呼びかけをしていたが、行動していただけませんでした。被害者宅は、敷地3面に擁壁が施されていて、裏山は竹やぶであったことから、防災に自信を持っていたことが行動に結びつかなかったと思われます。

調査の結果として、地域コミュニティのつながりの強さが、地域住民の自主避難や避難の呼びかけや共助といった助け合いにつながり、丹波市豪雨災害にて1名の犠牲者に抑えられたという結果になったのでしょうか。

御清聴ありがとうございました。



阪神・淡路大震災の教訓は生かされているのか？ 家具転倒及び屋内落下物の犠牲

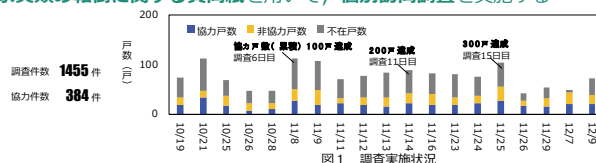
楠木 皇耶香 Sayaka Kusuki / 関西大学社会安全学部 4年

背景・目的

阪神・淡路大震災では、家屋倒壊や家具転倒によって多くの人命が失われた。震災後、「耐震対策や家具固定」が重視されるようになったものの、家具類の転倒に伴う犠牲は繰り返されている。2018年大阪府北部地震でも死者の半数にあたる3名が家具転倒及び屋内落下物が原因であった。本研究では、2018年大阪府北部地震における家具類の転倒と屋内落下物の発生状況を調査し、阪神・淡路大震災の教訓が生かされているのかを検証する。

手法

家具類の転倒に関する質問紙を用いて、個別訪問調査を実施する



結果

調査対象エリア

高槻で最も家屋被害が多かった町丁目
世帯数 一部損壊以上 建物被害率
1972 577 (高槻で最大) 29%



高槻市における被災建物棟数の分布 (一部損壊)

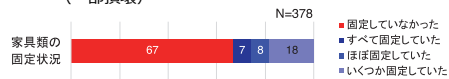


図2 調査対象エリアの概要

家具類の転倒状況

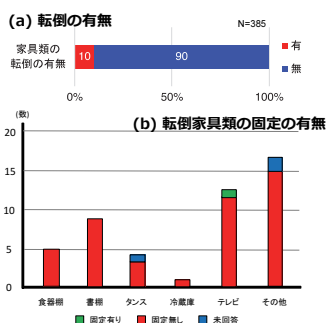


図3 家具類の転倒状況

- ・転倒率は10%。建物被害率より低い。空間的な偏りはなかった。
- ・書棚やテレビの転倒が多い。転倒したもののほとんどは固定無。

屋内落下物の発生状況

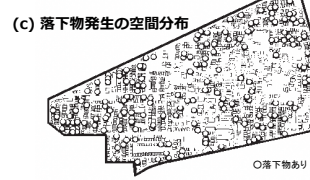
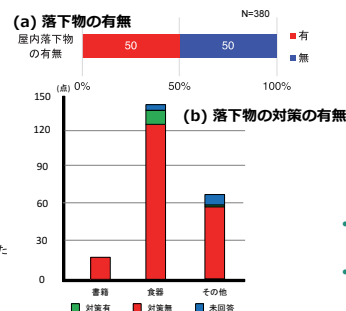


図4 屋内落下物の発生状況

- ・発生率は50%。建物被害率より高い。空間的な偏りはなかった。
- ・食器の落下が多い。落下したもののほとんどが無対策。

家具の固定率の変化

- ・阪神・淡路大震災以降、地震災害が発生する度に上昇
- ・25年前の教訓が生かされ、犠牲は減っているのか？

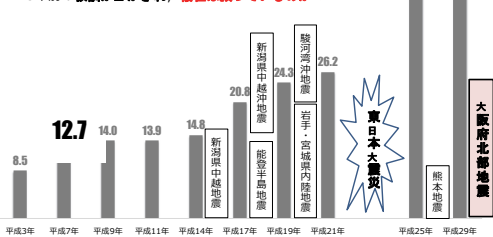


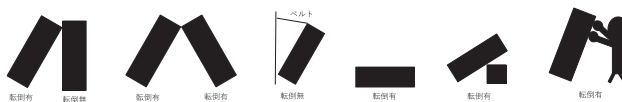
図5 家具類の固定率の変化 (出典：内閣府「防災に関する特別世論調査」)

結論

1. 対象エリアの家具類の固定率は、全国平均には及ばないものの、阪神・淡路大震災以降、上昇してきたものと考えられる。
2. 大阪府北部地震では、残された無対策の家具類の転倒と屋内落下物の発生が目立った。
3. 阪神・淡路大震災の教訓は、家具類の固定率の上昇という形で現れているものの、23年経過しても、なお、無対策の家具類等が多数残っており、死亡率の低下につながっていない可能性がある。



社会安全学部 / 社会安全研究科
総合防災・減災学分野 奥村研究室



○**関西大学 1** 私は、関西大学社会安全学部の楠木と申します。本日は、よろしくお願いします。

私は、本日は、家具類の転倒及び屋内落下物による犠牲に関して、「阪神・淡路大震災の教訓は生かされているのか」というテーマで成果を発表します。

まず、家具転倒による死者が発生する可能性のあった地震というのがどれくらいあると思われますか。私は、それを実際に気象庁のデータや総務省・消防庁などのデータを基に調査しました。

実際に過去70年間で家具転倒による死者が発生する可能性のあった地震は433個発生しており、1年間に6個発生していることとなります。それは、日本のどこかで2か月に1度発生しているということになり、また家具の転倒は、震度5弱から固定なし家具は発生することが分かっています。

また、家具の固定率ですが、阪神・淡路大震災以降、地震災害が発生するたびに上昇をしているんですが、内閣府の世論調査によると、40%近くまで上昇はしているんですが、25年前の教訓が生かされて犠牲は減っているのかどうかという懸念が浮かび上がります。

実際に家具類の転倒及び屋内落下物による犠牲は、過去の災害でどれほど起こっていたのかというのを、実際に新聞記事などを基に調査しました。

阪神・淡路大震災以降も死者は発生しており、2018年では、2件の家具類の転倒による死者、また屋内落下物に関しても、2007年以降、継続的に発生していることが分かりました。

目的としては、2018年大阪府北部地震における家具類の転倒及び屋内落下物の発生を調査し、阪神・淡路大震災の教訓は生かされているのかということについて検証することです。

手法は、前回に引き続き高槻市の津之江町1丁目で

質問調査を実施したので、その質問調査結果についてお話しします。

まず、津之江町1丁目は、世帯数が1,972軒で、実際に大阪府北部地震で一部損壊以上の被害に遭った建物は577棟あるため、建物被害率は29%になります。

調査は、大学名と名前を名乗り、地震に関しては2分ほど御協力を頂く形で実施しました。

戸別訪問調査は、全部で19日間実施しまして、その結果、全訪問戸数は1,455戸で、そのうち386戸に御協力を頂きました。

まず、地震発生前の家具類の固定状況ですが、「固定していなかった」という回答が67%で大半を占めていることが分かります。

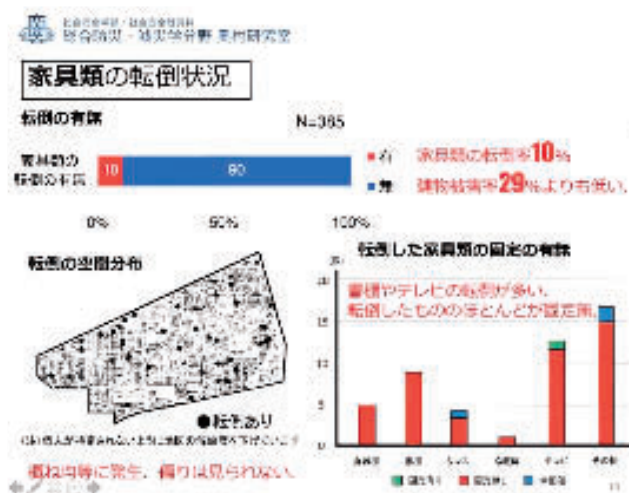
また、「全て固定していた」「ほぼ固定していた」「幾つか固定していた」という回答を合計した結果、高槻市津之江町1丁目における固定率は33%となり、全国平均の40.6%、およそ41%と比較すると、やや低い割合であることが分かりました。

続いて、家具や家電、家具類の転倒状況に関してですが、「家具や家電が転倒しましたか」という質問に対する「あり」の回答が10%で、「なし」の回答が90%という結果になりました。つまり、家具類の転倒率10%と建物被害率が29%よりも低いことが分かります。

また、家具類の転倒が発生した世帯にプロットし、空間的に表した結果、おおむね均等に発生しており、偏りは見られないことが分かりました。

そして、転倒した家具類の固定の有無ですが、書棚やテレビの転倒が多く、ほとんどが固定していない家具類の転倒によるものであることが判明しました。

また、屋内落下物の発生状況に関してですが、「書籍や食器等は散乱していましたか」という質問に対する回答は、「あり」と「なし」共に50%という結果になり



ました。つまり、落下物の発生率が50%で、建物被害率が29%ということで、建物被害率よりも高いということになります。

また、屋内落下物が発生した世帯にプロットして空間的に表した結果、おおむね均等に発生しており、偏りは見られないことが分かりました。

落下物の対策の有無ですが、食器の落下が多く、ほとんどが対策をしていない屋内収容物の落下によるものであることが判明しました。

最後に、家具類の転倒及び屋内落下物による発生率に関してですが、こちらは阪神・淡路大震災以前と阪神・淡路大震災以降の住宅で発生した家具類の転倒率及び屋内収容物の落下率を算出した結果になります。

震災前の古い住宅で発生した家具類の転倒が9%で、震災後の比較的新しい住宅で発生した家具類の転倒が10%という結果になりました。

また、震災前の古い住宅で発生した屋内収容物の落下率が44%で、震災後の比較的新しい住宅で発生した屋内収容物の落下率は54%という結果で、建築年代が阪神・淡路大震災以前か以降かによって転倒率及び落下率に大きな差は見られないということが分かりました。

結論です。家具類の固定率に関しては、地震が発生するたびに上昇し、阪神・淡路大震災以前の9%から41%になった。また、調査対象エリアの固定率は33%と、全国平均よりやや低い割合であった。

家具類の転倒状況に関しては、転倒率は10%となり、建物被害率よりも低い。また、空間的な偏りはなかった。書棚やテレビの転倒が多く、転倒した家具類は、ほとんどが事前に固定していなかった。

屋内落下物に関しては、発生率は50%となり、建物被害率より高い。また、空間的な偏りはなかった。食

器の落下が多く、ほとんどが事前に対策をしていなかった。

まとめです。対象エリアの家具類の固定率は全国平均に及ばないものの、阪神・淡路大震災以降は上昇してきたものと考えられます。

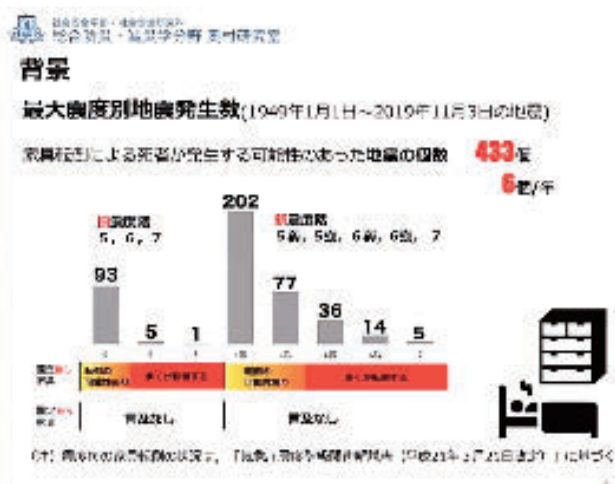
また、大阪府北部地震では、残された未対策の家具類の転倒及び屋内落下物の発生が顕著に表れていました。

そして、阪神・淡路大震災の教訓は、家具類の固定率の上昇という形で表れているものの、転倒率や落下率の低下という形では表れていませんでした。

また、23年経過しても、なお未対策の家具類等が多数残っているのが現状でした。

参考文献は以上です。

以上です。(拍手)



兵庫県立大学 防災リーダー教育プログラム



高校生と大学生が取り組む楽しく学べる防災 -あまおだ防災フェスの活動を通して-

兵庫県立大学防災リーダー教育プログラム

看護学部 西嶋沙来

理学部 櫻井未久

あまおだ減災フェスとは

尼崎小田高等学校の高校生の地域参画による地域防災力の向上を目的とした、あまおだ減災フェスの開催を兵庫県立大学が支援

■目的

1. 尼小田の学生及び教職員が防災・減災に関する学びを深めること
2. 地域防災の意識を向上させ、常に「自分事ごと」として考えること

尼小田すごろく

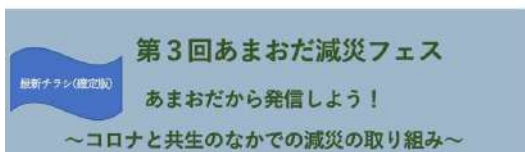
すごろくを通して、防災の知識を深める

- ・尼小田地区ならではの防災
- ・自助に関する知識と意識の向上

○内容

- ・クイズ
- ・非常用持ち出し袋
- ・緊急時に役立つことを体験
- ・防災グッズ作り
- ・記念品プレゼント
- ・すごろく振返り特集配布

兵庫県立大学 防災リーダー教育プログラム専攻生 尼小田すごろく



コロナと豪雨災害・台風の「複合災害」の中、今年度も「コロナと共生のなかでの減災の取り組み」を「尼小田・あまおだこうこう」から発信していきます。防災・減災について、「自分事」として考える時間になればと考えています。



令和2年11月14日(土) 9:30~12:30 (9時受付開始)

B棟視聴覚室&社会科教室&体育館1階食堂

会場 尼小田地区 尼崎小田高等学校 社会科教室 9:30~11:15

・講師 西嶋沙来 兵庫県立大学防災リーダー教育プログラム 看護学部

・協力 西嶋沙来 兵庫県立大学防災リーダー教育プログラム 看護学部

・協力 西嶋沙来 兵庫県立大学防災リーダー教育プログラム 看護学部

・協力 西嶋沙来 兵庫県立大学防災リーダー教育プログラム 看護学部

・協力 西嶋沙来 兵庫県立大学防災リーダー教育プログラム 看護学部

・協力 西嶋沙来 兵庫県立大学防災リーダー教育プログラム 看護学部

・協力 西嶋沙来 兵庫県立大学防災リーダー教育プログラム 看護学部

・協力 西嶋沙来 兵庫県立大学防災リーダー教育プログラム 看護学部

・協力 西嶋沙来 兵庫県立大学防災リーダー教育プログラム 看護学部

・協力 西嶋沙来 兵庫県立大学防災リーダー教育プログラム 看護学部

・協力 西嶋沙来 兵庫県立大学防災リーダー教育プログラム 看護学部

・協力 西嶋沙来 兵庫県立大学防災リーダー教育プログラム 看護学部

・協力 西嶋沙来 兵庫県立大学防災リーダー教育プログラム 看護学部

・協力 西嶋沙来 兵庫県立大学防災リーダー教育プログラム 看護学部

・協力 西嶋沙来 兵庫県立大学防災リーダー教育プログラム 看護学部

・協力 西嶋沙来 兵庫県立大学防災リーダー教育プログラム 看護学部

・協力 西嶋沙来 兵庫県立大学防災リーダー教育プログラム 看護学部

・協力 西嶋沙来 兵庫県立大学防災リーダー教育プログラム 看護学部

・協力 西嶋沙来 兵庫県立大学防災リーダー教育プログラム 看護学部

・協力 西嶋沙来 兵庫県立大学防災リーダー教育プログラム 看護学部

・協力 西嶋沙来 兵庫県立大学防災リーダー教育プログラム 看護学部

・協力 西嶋沙来 兵庫県立大学防災リーダー教育プログラム 看護学部

・協力 西嶋沙来 兵庫県立大学防災リーダー教育プログラム 看護学部

・協力 西嶋沙来 兵庫県立大学防災リーダー教育プログラム 看護学部

・協力 西嶋沙来 兵庫県立大学防災リーダー教育プログラム 看護学部

・協力 西嶋沙来 兵庫県立大学防災リーダー教育プログラム 看護学部

・協力 西嶋沙来 兵庫県立大学防災リーダー教育プログラム 看護学部

・協力 西嶋沙来 兵庫県立大学防災リーダー教育プログラム 看護学部

・協力 西嶋沙来 兵庫県立大学防災リーダー教育プログラム 看護学部

・協力 西嶋沙来 兵庫県立大学防災リーダー教育プログラム 看護学部

・協力 西嶋沙来 兵庫県立大学防災リーダー教育プログラム 看護学部

・協力 西嶋沙来 兵庫県立大学防災リーダー教育プログラム 看護学部

・協力 西嶋沙来 兵庫県立大学防災リーダー教育プログラム 看護学部

・協力 西嶋沙来 兵庫県立大学防災リーダー教育プログラム 看護学部

・協力 西嶋沙来 兵庫県立大学防災リーダー教育プログラム 看護学部

・協力 西嶋沙来 兵庫県立大学防災リーダー教育プログラム 看護学部

・協力 西嶋沙来 兵庫県立大学防災リーダー教育プログラム 看護学部

・協力 西嶋沙来 兵庫県立大学防災リーダー教育プログラム 看護学部

・協力 西嶋沙来 兵庫県立大学防災リーダー教育プログラム 看護学部

・協力 西嶋沙来 兵庫県立大学防災リーダー教育プログラム 看護学部

・協力 西嶋沙来 兵庫県立大学防災リーダー教育プログラム 看護学部

・協力 西嶋沙来 兵庫県立大学防災リーダー教育プログラム 看護学部

・協力 西嶋沙来 兵庫県立大学防災リーダー教育プログラム 看護学部

・協力 西嶋沙来 兵庫県立大学防災リーダー教育プログラム 看護学部

・協力 西嶋沙来 兵庫県立大学防災リーダー教育プログラム 看護学部

・協力 西嶋沙来 兵庫県立大学防災リーダー教育プログラム 看護学部

・協力 西嶋沙来 兵庫県立大学防災リーダー教育プログラム 看護学部

・協力 西嶋沙来 兵庫県立大学防災リーダー教育プログラム 看護学部

・協力 西嶋沙来 兵庫県立大学防災リーダー教育プログラム 看護学部

・協力 西嶋沙来 兵庫県立大学防災リーダー教育プログラム 看護学部

・協力 西嶋沙来 兵庫県立大学防災リーダー教育プログラム 看護学部

非常用持ち出し袋

- ・避難時に必要なものを考える
- ・非常用持ち出し袋の重さや避難時の大変さを体験する

○内容

- ・非常時に持ち出すものを30個から5個選ぶ
- ・水2Lは必ず入れる

防災グッズ作り

- ・ダンボールスリッパ
- ・ツナ缶ランプ
- ・キッチンペーパーでマスク
- ・簡易食器作り
- ・電池のサイズ変換
- ・ポリ袋カップ



緊急時に役立つことを体験

- ・ペットボトルライフジャケットを身につける
- ・組み立て式ヘルメットの装着



クイズ

- ・地震発生後、尼小田高周辺で想定される被害は？
- ・尼崎市のハザードマップの想定では、津波により尼崎小田高校の校舎が浸水する高さ？
- ・避難場所と避難所の違いは？ 等々

取組過程での学び

- ・参加者が楽しみながら学べる企画の必要性
- ・問題やグッズ作りの内容の考慮
- ・初めて知ったこともあった
- ・周りに教える能力
- ・尼小田地区ならではの防災とは何かを考える
- ・自助に関する知識と意識の向上

○**兵庫県立大学1** 「大学生と高校生が楽しく学べる防災」と題しまして、兵庫県立大学副専攻防災リーダー教育プログラムが参加しました「あまおだ減災フェス」について、ニシジマとサクライで発表していきたいと思います。よろしくお願いします。(拍手)

副専攻防災リーダー教育プログラムのカリキュラムの一環で、第3回「あまおだ減災フェス」に参加しました。こちらに示しているのが、今年度のチラシです。今年度は、11月14日に開催され、2時間という時間に短縮して開催されました。

それでは、「あまおだ減災フェス」について話したいと思います。

まずは、歴史です。兵庫県立大学の教員が尼崎小田高校に派遣されました。役職は、防災アドバイザーです。その後、大学院生も加わり、大学と高校での交流が深まっていきました。その結果、高校生の地域参画による地域防災力向上のため、「あまおだフェス」が開催されました。

次に、このフェスの目的です。尼小田の学生及び教職員が同時に防災・減災に関する学びを深めること、地域防災の意識を向上させ、常に自分事として考えることです。

それでは、私たちが「あまおだ減災フェス」に出展した「あまおだすごろく」について話していきたいと思います。

左下の画像は、高校生が実際に全て描いてくださった看板です。右の画像は、私たち副専攻生が作成した看板になっております。こちらは、当日、校舎の至るところに貼っていただきました。

すごろくの目的は、すごろくを通じて防災の知識を深めることです。の中で、尼小田地区ならではの防



災や自助に関する知識と意識の向上を図るということです。

次に、すごろくの内容です。クイズ、非常用持ち出し袋、緊急時に役立つことを体験、防災グッズづくり、記念品プレゼント、すごろく振り返り特集配布です。

すごろくの内容について、詳しく話していきたいと思います。

まずは、非常用持ち出し袋についてです。右上の画像は、実際に非常用持ち出し袋を背負っている様子です。狙いは、避難時に必要なものを考える。非常用持ち出し袋の重さや、避難時のしんどさを体感するです。方法は、非常時に持ち出すものを30個のうちから5個選ぶこと、そして水2リットルは必ず入れることです。

非常時に持ち出すものを30個から5個選ぶは、30個とも必要なのですが、限られたものの中で、なぜそのものが必要なかを考えてもらうことで、今後、非常用持ち出し袋をつくるときに参考になればと思い、実施しました。

水2リットルは必ず入れるというのは、避難時に、このリュックの中にたくさん物が入っており、非常に重たいことが考えられます。その状態で避難することを、少しでも自分事として考えてもらえればと思い、実施しました。

クイズについてです。狙いは、「防災の知識の深める」です。実際の問題を示してみようと思います。

こちらの上の2つの問題は、開催される尼崎小田高校や尼崎市という地域性を持った問題です。ほかに、「避難場所と避難所の違いは」といった、一般的な防災の知識を問う問題も取り入れました。

○**兵庫県立大学2** 緊急時に役立つことの体験についてです。

狙いは、非常時に役立つグッズについて学ぶです。

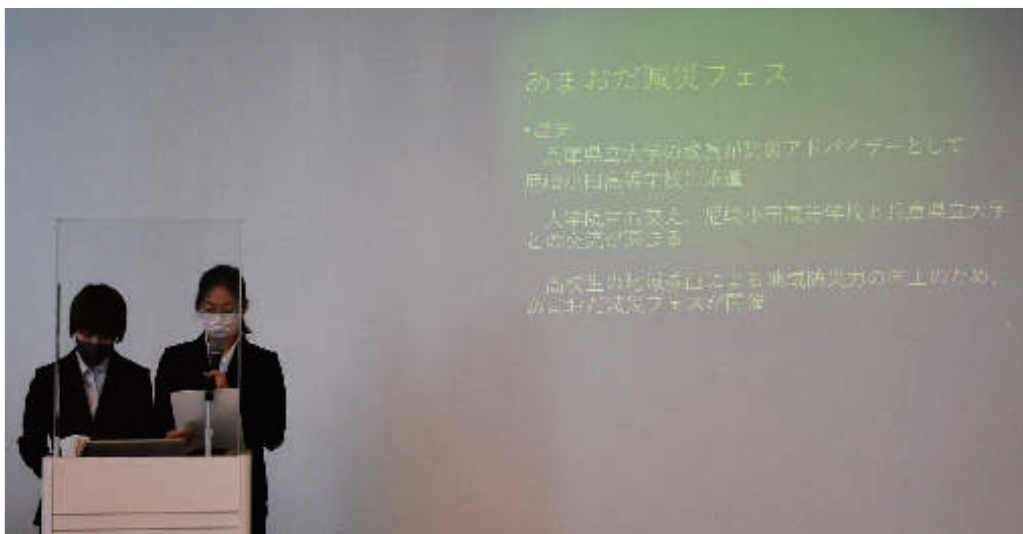
内容は、ペットボトルライフジャケットをつける、組み立て式ヘルメットの装着です。

実際の写真を紹介します。ポインターで示している左側が、ライフジャケットを着ている様子です。右側がヘルメットをかぶっている様子です。参加者からは、両方とも簡単にできて驚いたという感想をいただきました。

防災グッズづくりについてです。

狙いは、非常時に役立つグッズのつくり方を学ぶです。

内容は、段ボールスリッパ、ツナ缶ランプ、キッチンペーパーでマスク、簡易食器づくり、電池のサイズ



変換、ポリ袋かっぱです。一部、例を画像で紹介しています。

記念品プレゼントについてです。

狙いは、備えに必要な商品を知ってもらうです。

今から、ポインターで商品例を示していきたいと思っています。今示しているのが非常食になります。今示しているのが手回し発電ライトになります。その上にあるのがホイッスルになります。こちら、一番右下にあるのが簡易トイレになります。これらを先着順で選んでいただき、プレゼントいたしました。

すごろく振り返り特集についてです。

狙いは、今回のすごろくから得られる防災の知識を参加者の方に共有、そしてその知識を家族や友達などの他者との共有です。

内容は、防災に関するクイズ、グッズのレシピで、この1冊で「尼小田すごろく」を振り返っていただくことが可能となっております。振り返りとしていますが、ふだんから見ていただくことで、災害に備えることが可能となる内容にいたしました。

また、非常時にも役立つ情報が掲載されているため、避難時にも活用することができます。

こちらに示しているものが現物となります。欲しいと思われた方には、この会が終わった後に、先着順ではございますが、お配りいたします。受付のほうに置いておきますので、御自由にお取りください。

次に、製作過程での大学生の学びについて話していきたいと思っています。

参加者が楽しみながら学べる企画の必要性を考えなければならぬ。問題やグッズづくりの中身を深く考える必要があるということを考えさせられました。

このすごろくを通して初めて知ったこともあり、製

作者側としても学ぶことができました。加えて、クイズの解説やグッズの作り方を教えるといったことから、周りに教える能力を身につけることができました。

ここから、少しですが、当日の風景をお見せいたします。こちらは、実際にクイズの説明を大学の学生がやっているところです。こちらは、グッズをつくったときの写真です。左側、こちらがツナ缶ランプで、右側が牛乳パック食器をつくった画像になります。

最後に、すごろくのまとめです。

高校生の感想に、高校付近は昔海だったと聞いたことがある。だから、地震後の被害として液状化になるんだという感想がありました。その感想より、上側の尼小田地区ならではの防災という目的は達成したと考えられます。

また、このライフジャケットで浮けることを知った。つくった段ボールスリッパは、家で履くという感想もありました。その感想より、下側の自助に関する知識と意識の向上という目的は達成したと考えられます。

この2つの目的を達成したことと、高校生から頂いた、「このすごろく、めっちゃいい」「面白かった」という声より、今回のすごろくの大きな目的である「防災の知識を深める」という目的は達成したと考えられます。したがって、「尼小田すごろく」は成功したと言えます。

最後に、この画像は、写真を撮るときだけマスクを外しました。この御時世、開催さえも危ぶまれ、「あまおだ減災フェス」自体、オンライン開催であれば、この「尼小田すごろく」は実施できていませんでした。この状況下だったからこそ、「あまおだ減災フェス」が対面開催され、「尼小田すごろく」を実施できたことを大変うれしく思います。

パネルディスカッション

テーマ：KOBЕ のことば～新しい表現

【コーディネーター】

- 京都大学 防災研究所 助教 中野 元太さん
- 人と防災未来センター 主任研究員 高原 耕平さん

【グラフィックファシリテーション】

- 滋賀県立大学 4年生 多田 裕亮さん

【パネリスト】

- 兵庫県立舞子高等学校
松岡紗輝さん 三好彩香さん 下村勝哉学校長
- 兵庫県立明石南高等学校
濱田桃花さん 宮定夢実さん 高橋 徹先生

○司会 お待たせいたしました。それでは、パネルディスカッション「KOBЕ のことば～新しい表現」を始めます。

「KOBЕ のことば」の表現は、様々。学生たちは「震災」を伝えるアクションを模索する中で、新しいことばの表現を生み出しています。今の若者だからこそ伝わる表現とは、どのようなものでしょうか。先生の「震災」を同年代に伝える舞子高校と、映像を使って「震災」を発信する明石南高校と共に、時代とともに生まれ変わる新しい「KOBЕ のことば」の表現を考えます。

この時間は、できるだけ会場の皆さんでディスカッションできる活発な意見交換の場づくりを目標にしたいと思います。

出演者を御紹介します。

向かって左から、コーディネーターを担当していただきます京都大学防災研究所助教、中野元太さんと人と防災未来センター主任研究員、高原耕平さんです。

続きまして、パネリストとして、兵庫県立舞子高等学校の松岡紗輝さんと三好彩香さん、下村勝哉学校長、そして兵庫県立明石南高等学校の濱田桃花さんと宮定夢実さん、高橋徹先生です。

続きまして、舞台脇でグラフィックファシリテーションを担当していただきます滋賀県立大学4年生の多田裕亮さんです。

そのほか、本日御参加いただいている学生さんや関係者の皆様も意見交換にぜひ御参加ください。

ここからの進行は、コーディネーターの中野さんと高原さんをお願いしております。

それでは、中野さん、高原さん、よろしくお願いします。

○中野コーディネーター ただいま御紹介いただきました中野です。どうぞよろしくお願いします。

今日は、なかなか会場に皆さんいらっしゃらない中で、そしてこんな寒い中ですが、なるべく団らんと



というか、あったかい雰囲気をつくっていききたいなというふうに思っていますので、フロアからも自由に御発言をいただける時間も持ちたいと思いますので、どうぞよろしくお願いします。

これ、私ごとですけれども、何か私、とてもこの場に思いを持ってやっているというか、なぜかという、私自身が舞子高校の卒業生でして、15年前に卒業したんですけれども、そのときに、実は下村先生が舞子高校にいらっしゃって、なので15年前から実は下村先生にお世話になっているんですね。

この災害メモリアルアクション KOBЕ という場、災害メモリアルアクション KOBЕ の前の10年間、「災害メモリアル KOBЕ」でしたけれども、私が大学生の頃に、その「災害メモリアル KOBЕ」のときにパネルディスカッションにも出させていただいて、そして今では何か委員もさせていただいてということで、非常にメモリアルアクションとは、10年、15年ぐらいの付き合いになってきました。

そういうこともあって、今日、こういうふうにコーディネートできることをとてもうれしく思っています。

今回、このパネルディスカッションのテーマ「KOBЕ のことば～新しい表現」というふうにしました。

何でこういうものにしたのかと言うと、企画委員会のほうでもいろいろ話し合いまして、もう今の高校生・大学生の皆さんって、私たち、あるいは私たちの上の世代とは全く違う世界の見方とか感じ方をしていると思うんですよね。

なぜかという、もう大学生の皆さん、高校生の皆さんって、デジタルネイティブの時代に生まれて、生まれながらにしてスマホを操り、そして何か撮ったり、そして自分の力で発信するということを日常の中で何かされているんですね。

だけど、多分、私たちより上の世代って、デジタルバイリンガルみたいなのところがあって、後づけでそう

いうところをどんどんどんやってきたところもあるので、そういう意味で、このメモリアルアクションのテーマというのが、やっぱり今、高校生・大学生の人たち、震災を体験していない人たちが、彼らの感覚でもってどういうふうに関心世代、同年代という言葉も使っていましたけれども、同年代の人に伝えていくのかということをしっかり考えていく上では、今の高校生の皆さんの関心あるというか、好きな表現の仕方というのを、やっぱり私もちゃんと聞いていかないといけないんじゃないかというふうに思って、この「新しい表現」ということをテーマに、今日、ディスカッションを進めたいなというふうに思います。

何かつけ加えることはありますか。

○**高原コーディネーター** 特にないですが、何か火鉢とか置いていたらよかったかなと思っています。

○**中野コーディネーター** そうですね、ここにこたつがあつて火鉢があつたら、もうちょっと、今も手がかじかんでいる状況ですけども。

○**高原コーディネーター** 来年からはそのようにしますので、よろしくお願いします。

○**中野コーディネーター** そうですね、まず第一週目は、一回目は、ちょっと皆さんにしゃべってもらおうと思うんですけど、ウォーミングアップとして、もう皆さんも名前は言っていたので、もう一度自分の名前と、あと今日の朝御飯は何だったかというのと、それから発表を終えて、それから「災害メモリアルアクション KOBÉ」、ここまで1年間取り組んできて、今感じておられること、その3つを簡単に言っていればいいかなと思います。

じゃあ、まず高原さんから。

○**高原コーディネーター** 朝食は、いつもパンと紅茶に牛乳入ただけなんですけれども、最近は目玉焼きを、朝、作るようにしています。今日はちょっと時間がなくて、布団から出れなかったの、無理でした。

全体で楽しかったのは、キックオフのときに皆さん

に絵を描いていただいて、中間発表会で映画をつくっていただいたんですけども、そのアイデアを出したときは、楽しかったです。その後は、辛かったです。

○**中野コーディネーター** 何で辛かったんですか。

○**高原コーディネーター** いや、いろいろと調整を、仕事をしなきゃいけないというのが辛かったです。

○**中野コーディネーター** なるほど、そうですね。ありがとうございます。

じゃあ、右から順番に行くとして、私、今日の朝御飯は朝マックをしてきまして、朝、家を出るのが7時前だったんで、ちょっと用意する時間がなくて、朝マックをしてきました。

ちょっと質問が変わりましたね。この「災害メモリアルアクション KOBÉ」を通して何が面白かったかという質問にしたいと思うんですけども、私が面白かったのは、この「災害メモリアルアクション KOBÉ」を1年通して、最初にキックオフ、ミーティングをやって、それから中間報告会をやって、今日に至るわけですけど、中間報告会のときにワークショップをやったんですね。ワークショップをやったときに、皆さんそれぞれのグループにスマホを1台持ってもらって、それで1分間の映画を撮ってくださいってやりましたよね、いらっしゃっていなかった人もいるかもしれないですけど。その映画のテーマは特に決めなかったんですけど、人と防災未来センターの中で撮ってもいいし、展示物とかを使って映画を撮ってもいいし、外で撮ってもいいですよというふうにやりました。

私、てっきり「災害メモリアルアクション KOBÉ」というタイトルだから、展示物を撮って、それをテーマに震災のことを伝えるみたいな映画を撮ってくれる人が多いんじゃないかなと勝手に思っていたんですけど、どのグループも展示物を撮らなかった。全てのグループが、外で、非常に高校生・大学生にしか多分思いつかないんでしょうね。いろんな向きにスマホを置いて、その上を飛んだりとか、あるいは遠近感をうまく使って何かいろんな表現をしたりとかというのをやっていました。何か、そこが私、とても一番面白かったところですかね。

じゃあ、下村先生、お願いします。

○**下村先生** どうも失礼いたします。

今日の朝食なんですけれども、私、あんまりふだん食べないんですが、今日は少し時間があつたので、コーヒーとパンを、パンも実はうちの妻の自家製のパンを食べてまいりました。

そうですね、「災害メモリアルアクション KOBÉ」



なんです、一番、ここの隣に教え子と一緒に横におれるということ、たしか中野君と、ここも来ましたよね。必ず舞子高校では、ここ、人と防災未来センターにも来て、僕、環境防災科を担当しておりましたんで、一緒に来たんじゃないかなと。また、ネパールに2回とも行きましたよね。ネパールに引率ということで、2回も彼と一緒にいった。その彼と隣に座って、何か不思議な気がします。

そんなところでございます。

○三好さん 舞子高校の三好彩香です。

今日食べたものは、食パンとみそ汁で、和洋折衷みたいな感じなんですけど、この組み合わせが一番好きなので、いつも食べています。

この「災害メモリアルアクション KOBÉ」を通して楽しかったことは、いろいろあるんですけど、一番印象に残っているのは、キックオフ会で、キックオフ会のイラストがあったじゃないですか。そのイラストを通して地元の魅力を再発見したのが一番楽しかったなと思います。

以上です。

○松岡さん 舞子高校環境防災科3年の松岡紗輝です。

私は、朝御飯は食べていません。基本、朝御飯食べないんですけど、たまに食べるときは、白御飯だけ食べて学校に行く感じになっています。

「災害メモリアルアクション KOBÉ」を通して楽しかったのは、舞子高校の取組にはなるんですけど、後ろに提示している年表づくりがすごく楽しかったなと思っています。

これ、去年は、結構、いるだけの先生の話聞いたんですけど、年齢ごとに全然思ったこととかが違って、そこの違いがすごく面白くて、楽しく感じました。

以上です。

○濱田さん 明南高校3年の濱田です。

今日は、いつもはめちゃくちゃ食べてくるんですけど、ちょっと今日は寝坊しちゃって、駅で買ったものを外で食べていました。

1年間通して、「災害メモリアルアクション KOBÉ」は、今年、今日来たのが初めてなので、残り2回のことは私はあんまり知らないんですけど、今日来て、3年間、防災のこういう取組を通して、会ったことのない学校の方がいらしゃったので、その学校の取組を聞いたのがよかったなと思います。

○宮定さん 明石南高校2年生の宮定です。

今日食べた朝御飯は、グラノーラとヤクルトを飲み

ました。

1年間を通して楽しかったことは、キックオフ会に参加させてもらったんですけど、キックオフ会で描いた絵とかも楽しかったし、キックオフ会と今回を通して、結構顔なじみの方とかもできて、気軽に話せることとか挨拶ができたりして、私たちが体験していないこととかをたくさん聞いたことが楽しかったです。

○高橋先生 明石南の高橋です。

朝は、昨日がカレーだったので、そのまま朝もカレーを食べてきました。あと、ミカン1個ですけども、ちょっと物足りなかったんで、西明石駅で待っている間にセブンイレブンのドーナツとコーヒーも食べました。「何ぼほど食べるんやろう」と思いましたけど。

去年は、ポスターを貼っていただいて、その前で今の3年生になる子らと、それから去年もこの子は来ていましたけど、説明とかをしていただけたんですけど、今年からちょっと中に入れていただきまして、一番面白いといいますが、感じたのは「ああ、やっぱりうちの子、違うな」と思いました。「違うな」というのは、何かこう種類が違うなみたいな、そんな感じがしています。

これは、実はほかの所へ行っても言われます。防災ジュニアリーダーというのは、兵庫県で中学生も交えてやっているんですけど、あるときに2つぐらいの学校の先生から「この子たち一体何なんですか」と言われました。自分でも思っているんですけど、それが楽しかったなと思っています。

以上です。

○中野コーディネーター その違うなというのは、どんなふうになっちゃって言われるんですか。

○高橋先生 いや、多分、不思議なんじゃないかな。何か匂いが違う、空気が違う。今日はおとなしくしているんですけども、ふだんほとんど女子高の放課後状態なんで、私もそろそろ嫌になってきてるんですけどね(笑)、実を言うと。

○中野コーディネーター それを聞いて、濱田さん、宮定さん、どうですか。ほかの同年代の高校生とかを見て、違うなって思いますか、自分で。

○濱田さん 今日、明南から4人来ているんですけど、本当はもっといて、あと13人いるんですけど、今日はたまたまこのメンバーだからこの空気だけで、学校に行ったら、本当にもっと「ヤバい」。私たち部活じゃないんですけど、多分どんな学校にいる団体よりもキャラが濃い人が集まっていると思うんで、間違っていないなと思います。

○宮定さん 今さっき言ってたとおり、この4人だから今日はちょっと「マシかな」と思うんですけど、学校に行ったら、部活じゃないというのもあって、教室とかに集まることあるんですけど、入ってきたときからもう誰かがしゃべっていたりとか、普通にすごい自由で騒がしいので、そこも楽しいです。

○中野コーディネーター なるほど。多分、その自由なところ、誰でも何かめっちゃしゃべれるというところが、何かいいところなんでしょうね。

今日の発表とか、話を聞いていて、防災教育のいろんな教室とかをやったり、エプロンシアターをつくっていたり、動画を撮ったり、何かやっているじゃないですか。何かああいうのって、もう皆さん自身が、わあ、これやろうって決めているんですか。ああいうのって、どんなふうにアイデアが出てくるんですかね。

○濱田さん あれは、「にげろ！あにまるず」のほうは、1年生のときに、ちょっと最初は軽い気持ちで自分がしたいから言っただけで、それにみんなが協力をしてくれて作成できて、コロナのほうの動画は、あれは先生がみんなに言ってくださったんで、あれはみんなでした。

○中野コーディネーター 何か「にげろ！あにまるず」とかは、皆さんが話し合っただけで決めたとか、ほかの活動とかというの、皆さんで一応話し合っただけで、やっているということなんですかね。

○高橋先生 いや、最初にちょっとだけ言うんですよ。さっきの「にげろ！あにまるず」を体育館でやったのも、実は先輩たちも何かいろいろしようとして挫折していたんですよ。ちょうどこの子たちの代に7人も入ってきて、「こんな7人もヤバいな」と思っていたんですけど、やっぱり「ヤバい」のが3、4人いたんですよ。これ、チャンスかなと思って、軽く言ったんですよ。「何か作れよ」って。何か女子高の放課後状態でわあと言っている間に、いつの間にかできた。「こんなしょう」って。

ボードゲームのは、明石高専さんとの交流の中ででき上って、その次のは、太田先生が「この続きがあったら面白いな」と僕におっしゃったんで、「おい、続きをつくれや」と言ったらできたんです。何か、いつの間にかできているという感じがですね。

○中野コーディネーター そうですね、いつの間にかできている明石南高校のほうを見て、高原さん、どう見ます。

○高原コーディネーター 僕は、女子高の放課後というのをこれまでも知らなかったし、これから知らない

ので、よく分かんないなと思い、何か楽しいということの中に、いろんな意味合いが絡んでいるのかなと思っていて、みんな仲のいい人とか、ちょっとやばい人がいて、わちゃわちゃ楽しいっていうのと、何か挫折があったというふうにおっしゃっていましたが、これをやっぱりやらないあかんと違うかなとか、できるかどうか分らんけど頑張ってみようかって、取り組んでいるときの楽しさっていうのが、その2つがうまく組み合わせられているような、そういうところがあるのかなと思いますが、そんなんでいいんですか。合っている。よかった。

○中野コーディネーター じゃあ、舞子高校さんにもぜひ伺いたいんですけども、明石南高校さんは、もうみんな集まったら何かができていくというような雰囲気だされているということですけども、舞子高校では、2年にわたって、先生の話聞いて年表をついたり、冊子にまとめたというのをやってきましたけれど、あれはどういうふうに進めてきたんですか。

○松岡さん どういうふうに進めてきた。

○中野コーディネーター あれ、きっかけって、何であれは始まったんですしたっけ。

○松岡さん 何か、自分たちは外部の学校外の人にお話を聞くことは、授業とか、めっちゃあるんですけど、学校の先生に聞いたことないよねっていう話になってから、じゃあ学校の先生に聞いてみよって言ったときに、何かどうまとめていくみたいな話になったときに、今の3年生が何か年表とか冊子にしたら面白いんじゃないという話になって、ああ、じゃあそれをやろうみたいな感じで、何か簡単にというか、何となくやってみたら、いい感じになって、今に至るみたいな感じですよ。

○中野コーディネーター 何か明石南高校さんも舞子高校さんも、何か面白そうみたいな、何かいい感じっていうのが、何か結構原動力になって、ここまで活動を続けているんだなっていうのが、何かよく分かりましたね。

ちなみに、もう舞子高校の先生全員に話は聞けたんですしたっけ。

○松岡さん 全員ではないんですけど、去年いた先生方と今年赴任されてきた先生の大体は聞くことができたかなと思っています。

○中野コーディネーター ちなみに、三好さん、松岡さん、どちらでもいいんですけど、どの先生の話が何か一番印象に残っていたりしますか。

○三好さん 私は、去年のものになるんですけど、校

長先生の話が。

○中野コーディネーター 空気を読んだんじゃないですね。

○三好さん 空気を読んだわけじゃないんですけど、冊子を読んで、阪神・淡路大震災の淡路を忘れないでほしいという、その言葉に感銘を受けたんで、一番印象に残っています。

○下村先生 せっかくですから、実は環境防災科が生まれてから、もう19年、来年で20年を迎えるわけなんですけれども、あまり学校の先生に被災体験を聞いたというようなこと、かつてなかったんで、僕とこに来たときに、おお、やっと来たかというような感じで、僕もちょっと当時やっぱりしんどかったんで、その思いを生徒たちにかなり長くしゃべってしまって、なかなかしゃべったことがないんで、みんな被災者やった人は、一人しゃべり出したら、1時間や2時間、みんな思いをしゃべることができると思うんで、ただ、特にやっぱり僕は教師なんで、教師として、あのときの取った行動が本当に正しかったのかなというのがすごくあって、これも話に載っていたと思うけど、僕、逃げちゃったんですよ。

自分の子供が小さかったんで、1週間ほどで神戸を脱出して、姫路の北側の田舎のほうへ逃げて行って、当時、県立尼崎高校というところに勤めていたんですけど、もう10日以上学校へ行けなかったと。行けなかったというのがあるんですけども、その取った行動が、家族を第一に思った行動が、本当に正しかったのか、それとも、いや、そんな振り捨てて学校へ行くべきやったのか、ちょっと今でも答えを出していないんですが、今の立場やったら行きますよ、今の立場やったら行くんですけども。

○中野コーディネーター 私も下村先生の話聞いたのは、今日が初めてでしたね。ネパールに2回も一緒にに行っているのに、一度も聞いたことがなかったです。

ちなみに、三好さんは、その淡路っていう言葉を忘れないでっていう下村先生からのメッセージ、なぜその言葉が一番印象に残っているんですかね。

○三好さん 自分、淡路島に住んでいて、何となく報道とかを見ていると、神戸の映像が多かったような気がして、淡路島も被害があるのに、何か忘れ去られている感じがして、何かその先生の言葉に、ああって感銘を受けました。

○下村先生 あれね、実は最近、僕、すごく疑問を持っているんですけども、朝日新聞も取っているんですけども、「阪神大震災」という言葉が出たりして、ど



うして「淡路」という言葉が入ったのかということをお皆さん忘れちゃっているのかなと思って、非常に疑問があって、あの北淡地区がすごかったじゃないですか。当時の北淡の人たちの頑張り、私も実は舞子高校を転出した後は、津名高校と言いまして、淡路の北部の学校に転出していて、本当に大変な思いをしたのに、今、どうしてかなというのがあってね。すみません。

○中野コーディネーター ありがとうございます。

何か私ばかりしゃべってばかりですけども、高原さん、どうですか。

○高原コーディネーター 私はすごいさっきびっくりしていたのが、フィルム、そんな意味があったのかと。普通に、あそこにあるときは、何か汚れへんようにしているのかなと思って見てたら、発表のときにぴらってなって、ああってなったんですけども、あれって何となくいい感じの中で何となくできたんですか。

○松岡さん フィルムのやつですか、フィルムに関しては、元太さんが一回、舞子高校と元太さんのところでZoomをやったときがあって、そのときに何かどう足していくか迷っていますというお話をさせていただいたら、透明なフィルムとかを使って足していくのもできると思うから、それもいいと思うよというアドバイスを聞いて、それ、みんなでやってみようという話になって、フィルムを使って足すようにしていています。

○高原コーディネーター 元太さんのアイデアだったんですね。

○中野コーディネーター ああ、一応、ありがとうございます、何かそういうふうに言っていたいて。

一応、私も企画委員として舞子高校さんのサポートという役があるので、Zoomとかでちょっとお話とかさせていただいて、本当にいいものができてきたんで、それをもっともっと見やすくするにはどうしたらいいだろうという話をいろいろしていたら、フィルムとかを使ってみるといいんじゃないかなと。



○**高原コーディネーター** ありがとうございます。

すごい面白いと思ったのが、やばいもそうなんですけど、何となくもそうなんですけど、何となくって、今から何となくをするぞって言ってできないじゃないですか。今からやばくて楽しい感じをこのチームをつくるんだっていうんじゃなくて、何かいつの間にか何となくうまいことってただけども、何かあらかじめ準備してないといけないし、でもそこから何かいろいろいいものができるって、これどうやったらいいのかなっていうのが、すごいちょっと気になってきたというところがあります。

○**中野コーディネーター** それは振りですか。振りではない。

そうですね、いや、その何となく楽しそう、面白そうの中に、いや、私、勝手に舞子高校さんの活動を見ていて思ったのは、ふだん確かに震災体験を聞くときて、大体全く知らない人から聞くことが多いじゃないですか。もともと面識はなかったけど、その方から聞いてみたという。

けど、舞子高校の場合だと、ふだん部活とか授業とかでお世話になっている先生が先にあって、その先生に震災体験を聞くとっていう。何か、もともと親近感を持っている人に話を聞いて、何か、いわゆる楽しいって意味での面白いじゃなくて、この先生にはこういう背景があったんだなということが分かるという楽しさっていうんですかね、何かそういうのがあるから、ここまで一気に進んできたんじゃないかなと思うんですよ。その辺、どうですかって聞こうと思うんです。

つまり、学校の先生の話、震災体験を聞く前と後で、何かその先生に対する見方って変わりましたかっていうのを聞こうと思うんですけど、それについて考えていただいている間にもうちょっとだけ話すと、もう一個面白いと思ったのが、舞子高校さんが今つくっている冊子、ちょっとだけスライドに出てきましたよね。覚えておられる方もいるかもしれないですけど、四つ

切りになっていて、似顔絵が描いてあるんですよ。似顔絵って、多分、あれ、高校生にしか描けないじゃないですか、自分の先生の似顔絵って。しかも、何かてるてる坊主みたいな、これ、ちょっと悪意があるんじゃないかぐらいの似顔絵もあったりしますよね、特徴的な。でも、あれって何か皆さんにしか描けないなって、何かその親しみの近さで震災体験を聞くというのが、何か面白さの根源にあるのかなと勝手に思ったりしてたんです。

ちょっと話を戻して、聞く前と聞いた後って、何か変わりましたか、自分の部活の先生とか、あるいは校長先生とか、数学を教えてくれる先生とか、誰でもいいんですけど。

○**松岡さん** そうですね、私がふだん関わっている先生は、すごい元気な先生が多いんですけど、その先生からお話を聞いた後って、何かふだん先生が口癖のように言っていることに対して、こういう意味があんなんとかというのがすごく分かったような気がして、いつもはうるさいなとか思っていた部分もあったんですけど、何かそういうのは、正直、あんまり思わなくなって、こういうことがあるから言いよるんやなみたいなことを感じるようにはなりました。

○**三好さん** 自分は、顧問の先生の話の冊子で見たときに、何か厳しい理由が分かった気がして、ふだんは優しい先生で、何でも話せる先生なんですけど、ちょっとここでは言えない言葉を書いたときとかには、すごく厳しくて、その言葉の裏には、阪神・淡路大震災のことがあって、そう厳しくなっているんだということを知りました。

○**中野コーディネーター** なるほど。じゃあ、やっぱり聞く前と聞いた後で、震災体験について知れただけじゃなくて、何か学校に向かうときの心持ちも何か皆さん変わってきたみたいなのところがあるんでしょうね、きっと。それを聞いて、校長先生としてはどうでしょう。

○**下村先生** やっぱり学校教育の中ですから、いろんな場面で先生と子供たちが、授業だけじゃなくて、いろんな場面で、こういった意見交換とかをやっていたら、相互理解というか、深めてもらっているのは、本当にうれしいことやなと思いますね。

やっぱり、ちょっと誰かは後で聞きたいなというのがあります。

○**中野コーディネーター** そうすると、明石南高校さんのほうに行きたいと思うんですけど、今、ちょうど話題が震災の体験というようなことにもなってきました

けども、多分、明石南高校さんのほうでは、阪神・淡路大震災にっていうことももちろんあるけれども、東日本大震災のほうで被災された方のお話とかも聞く機会が今まであったと思うんですね。やっぱり、そういうところで聞いているいろんな言葉っていうのは、何か皆さんの活動の中にも生かされているなっていうようなところってあるんですかね。

○濱田さん 1年生のときに東北に行って、ふだん、今までの防災のだったら、経験をした大人の方、学校の先生、親からの話を聞くことがあったり、実際、東日本大震災があったとき、私も小学生だったので、ニュースを見て、キャスターの人の話をを聞いたり、ニュースの言葉を聞いたりしていたんですけど、実際に現地に行って同い年とか、2つ上の方、実際に経験していた同い年ぐらいの人から聞く言葉は、何かその何倍も重たいじゃないですけど、考えるものがあつたし、現地のこういう資料館に行って映像を見たんですけど、そのときの映像とかも感慨深いものがあつたし、全然違うなと思いました。

○宮定さん 私は、昨年度1年生のときに、コロナの影響で東北に行けてなくて、まだ防災ジュニアリーダーに入って東北に行っていないんですけど、今年も3月に、まだ行けるかは分からないんですけど、予定としてはしているので、そこでいろいろお話を聞いて、自分のためにも知識を得たり、自分に得た知識を同世代の子たちに広めていけたらいいなと思います。

○中野コーディネーター ちなみに、宮定さんは、濱田さんから何か東北に行ったときの話って聞くことはあるんですね。あるいは、先輩から聞いたりとかってありましたか。

○宮定さん どういう話とかは具体的にはあんまり聞いたことはないんですけど、東北に南三陸町の志津川高校さんと交流をするほかにも、ワカメ漁の手伝いとかも毎年しているので、そういう写真とかをたくさん見せてもらったことはあります。

○高原コーディネーター 重たいっていう表現を使われていたんですけど、重たいっていうのは、暗い、ネガティブ、駄目だっていうものなのか、ずずんと来て、大事だな。後者のほう。

○濱田さん そうです。

○高原コーディネーター そのずずんと来た後、どうされますか。

○濱田さん それを私たちが伝えることって大切だと思うんです。それを伝えないといけないと思うんですけど、私たちが行った南三陸町は、宮城県とか福島県全

部含めて、まだまだ全然復興していないですけど、めちゃくちゃいい町なんですよ。めっちゃ御飯もおいしいし、めっちゃ人もいいし。

○高原コーディネーター 僕も志津川に行っているの

で。
○濱田さん ああ、めちゃくちゃいいとこなんで、私から伝えていくことももちろん大切なんですけど、ぜひ行ってほしいなというのもあるって、ぜひ行ってその場で見たほうがやっぱり違う。その地面を踏むっていうのも、全然違うと思うんです、私から言うよりも。だから、本当はもっと伝えていかないといけないんですけど、それ以上にもっと行ってみたいので、もっといいところをもっと伝えていきたいなって思います。

○高原コーディネーター 自分の、単に、ああ、そうなんだって消化するのと同時に、自分から何かをしていって、ほかの人にも伝わっていったらうれしいなっていうふうに進んでいくみたいな感じかな。ありがとうございます。

○中野コーディネーター そうですね、今、お話を伺った理由の一つに、明石南高校さんの活動をいろいろ聞いていると、とても誰かとつながっていこうというように、今、どんだんうんうんとうなずいてくれていますが、つながっていこうとするような、何か働きを持っているような気がするんですね。そこで、とても意識されているんですかね、今、うんうんうんってめっちゃうなずいてくれましたけど。

○濱田さん 私たちは、そうですね、ゲームとかの内容も結構大人に対して発信するとか高校生に発信するというのもそうなんですけど、東日本大震災を知らない幼稚園の子とか小学生の子に地震について分かりやすく楽しく伝えるということを意識していて、それ以外にも障害者施設のほうに行かせてもらってクリスマス会をさせていただいたり、高齢者施設と一緒にゲームをしたりして、いろんな人と接する機会がたくさんあったので、ここにいる人たちだけじゃなくて、もっと小さい人たちともつながっていけるような活動にしたいと思っています。

○中野コーディネーター なるほど。まさに、コロナになってしまって、でもその中でもつながっていこうってしている中で生まれたアイデアに、何か動画を発信するというのがあったように思うんですね。あの動画、ちなみにどんな動画があったのかというのをぜひ皆さんにも伝えていただきたいというのが1つと、何かその動画に対していろんなところからフィードバックというんですかね、オンラインで動画を見たよ

みたいなのって何かありましたか。

○濱田さん 休校中に何も例年どおりにできなくて、グループLINEがあるんですけど、そこで先生が、コロナで大変な人たちへ向けての応援メッセージをYouTubeに上げようという話をしてくださって、ボイスメッセージとか動画で音声だけで、各それぞれ一人ずつ一言メッセージみたいなのを、そのグループLINEに送って、先生が編集してくださったものをYouTubeに上げました。

○中野コーディネーター 何かそれに対して、YouTubeとかってコメントが入るじゃないですか。ああいうのって、特になかったですかね。

○高橋先生 コメントは何件もあったと思うんですけど、「すごいですね」とか「ありがとうございました」とかというのはあったと思うんですけど。4月の終わりに近かったんです。4月の20日か21日か、それぐらいに出したんですよ、ちょっといろいろもたもたして

いて。
最初アクセス数を見たらなかなか増えへんのですよね、やっぱり。「今日でやっと30か」って。さっき、フォローがやっと何百というのがありましたけれども、そのとおりで、100も行かなかったんですよ。

驚いたのは、休校が2か月目に入りましたよね、5月の。ゴールデンウィークのあたりから突然、何か200、300、400と増えていったんですよ。ここで誰かがたまたま見て「こんなあるわ」というので、何か口コミのような形で、もう今止まっていますけども、800ぐらいまではずっと行きましたね。このままもっと1000とかに行くかなと思ったら、やっぱりあれは休校中の話ですから。だからかなり反響はあったなと思いました。

○中野コーディネーター なるほど、やっぱりじゃあそういう高校生の皆さんのメッセージがいろんな人に届いていったということですよ。

私が個人的に驚いたのは、高橋先生が女子高生のLINEグループに入っているということのほうに何か驚きでしたけど。

○高橋先生 顧問やから、顧問としてですよ。

いや、そんなん入る気はなかったんですよ。私ずっとガラケーやったんですよ。それで、うるさかったんですよ。早うスマホにしろって。ところが、唯一の救いが壊れちゃって、携帯屋さんへ行ったらスマホしかなかったんですよ。ほとんど。しょうがないなと思って、あるときスマホを見せてしまったら、先生、LINEしろって。この辺の何人かでいつの間にか引き込まれ

て、時々「うざい」のは、勝手にわけ分からん会話をして、ピコン、ピコン「何やねん？」って見たら、何かズラッとしょうもないスタンプを押したりとかというのがあるので、そのときは音を消したりします(笑)。

○中野コーディネーター ありがとうございます。とてもいい先生と高校生の皆さんの関係が見て取れるかなというふうに思いました。

ここまで話を伺ってきて、明石南高校の皆さんって、本当にいろんな人とつながろうっていうような活動をこの1年されてきて、舞子高校の皆さんは、本当に近い人たちからしっかり聞き取ろうっていう活動をされてきたんだなということがよく分かりました。

どうでしょう、ここで一回、フロアのほうにも聞いてみましょうか。

まず、フロアの皆さんで、舞子高校さん、明石南高校さん、何か聞いてみたいこととかってありますか。

じゃあ、牧先生、お願いします。

○牧企画委員長 すみません、京都大学の防災研究所の牧と申します。

先ほどから議論の中で、デジタルネイティブの皆さんなんですけど、舞子高校の方、絵を描いていたじゃないですか。そのほうが伝わるって言ったんですけど、そこら辺、デジタル技術を・・・ですけども、やっぱりああいうものっていいなというふうな、何かどういふうなイメージを持っておられるのかなというのを伺いできたらと思います。

○松岡さん そうですね、手描きのものとかを町なかでもらったりとかたまに思うんですけど、そのときって、何かすごい温かさを感じるというか、データとしてめっちゃいろいろコピーされておっているんなところに出回っているようなやつに比べて、何かすごい温か味もあるし、一人一人文字が違うから、その人の描いた気持ちとかも伝わったりとかするし、自分たちは震災を経験していないという部分もあって、自分たちの同世代とか、同じような年齢の人は、別に正直、そんな知りたくはないと思うんですよ。何か知っても、興味がないみたいな感じで思われたりすると思うんですけど、自分たちが描いていることによって、こういう勉強をしている人もいるんだなというのをまず知ってもらって、そこから手描きで伝えることで、自分たちが描いた気持ちも伝わるし、身近な人のお話とか感じたことも伝わりやすいのかなと思って、手描きにするということはこだわっていたりはしています。

○中野コーディネーター ありがとうございます。

どうぞ、三好さん。いいですよ、話してください。

○**三好さん** ほとんど先輩と同じなんですけど、自分、ちょっとデジタルネイティブの世代なんですけど、デジタルで絵を描くのが苦手でした、やっぱり手描きのほうが個性もありますし、何かデジタルの絵って、きれいに描けるけど、特別感がない感じがして、個性のある手描きのほうがいいかなというのもあって、冊子に個性的な手描きを描きました。

○**高橋先生** ついでに、教育する側からなんですけれども、電気とかそういうのが全然使えないということも想定して、手描きで伝えるというようなことも頭に入しながら指導していると思います。

○**中野コーディネーター** ありがとうございます。

私も、さっきも言いましたけど、高校生の皆さんが描いている手描きの絵、似顔絵とか、本当にいいなと、目を引くなというふうに思っていますので、ああ、そういうふうな思いを持って手描きをしていたんだなということがよくわかりました。

ほかに、フロアの皆さんで、じゃあ安富先生、お願いします。

○**安富委員** 神戸学院大学の安富です。いつもお世話になっています。

質問じゃないですけど、コメントというか、先ほど阪神・淡路大震災の「淡路」という言葉が新聞に消えるということで、僕ちょっと元新聞記者なんで、言い訳と、言い訳じゃないですね、しょうと。

確かにそのとおりで、私が10年ぐらい前にここに来たときに、それまで僕もずっと新聞で書くときは「阪神大震災」って書いていたんです。ここへ来て、「淡路」という言葉を必ず入れるということを覚えて、僕はそれからまた本社に戻って、「阪神・淡路大震災」って書くようにしたんですけども、ほかの記者は書かないんです。

なぜかというね、新聞というのは、すぐ短くしたがるんですね。たった2文字なのに、たった2文字を短くして、ほかの文字を入れたいということで、そういう教育をしてしまっているんです、新聞記者にはね。

テレビはちょっとどうか分かんのですが、ということで、僕とこは読売新聞ですけど、朝日さんもそうやし、今もね、この25年たって、いよいよ26年になってきて風化が進むと、余計に「淡路」というのが入ってこなくなるので、ちょっとやばいかなと思っています。

それは、校長先生がおっしゃったように非常に大事なことなんで、やっぱり淡路というの大きな被害を

受けて、あそこはもちろん震源地に近いわけですから、そういうのをきっちり書いていかなあかんと思います。

あと、ちょっと感想ですけれども、すばらしいなと思ったのは、2つの高校とも現場に行って人の話を聞くということがすごく大事だなと。僕も大学で、うちのゼミの子たちにそういうことをずっと言っているんですけど、なかなか行ってくれないんですね。ぜひ、コロナで難しいんですけど、東北とか行ければ行って、全然やっぱり違うと思うので、感じてほしいと思います。ありがとうございます。

○**中野コーディネーター** ありがとうございます。

何かそれについて、下村先生とか何かありますか。

○**下村先生** ぜひ淡路を忘れないように、ずっとよろしくをお願いします。

○**中野コーディネーター** では、奥村先生。

○**奥村委員** ありがとうございます。関西大学社会安全学部の奥村と言います。

今日、彦根東高校の学生さんたちがオンラインの発表で、阪神・淡路大震災を知っていても人と防災未来センターを知っている人がほとんどいないから、もっと人と防災未来センターのことを知ってもらわないかんのん違うかという話をされていましたよね。だけど、人と防災未来センターに集まって何かを絵を描こうって取組をしたときに、誰一人として展示の映像を撮らなかったという実態を考えると、ここに来たって何も響かないんじゃないかという懸念もあるんですね。

その上で、さっきの志津川に行ってきた、みんなに行ってほしいって言ってくれていた学生さんのコメントは私は刺さったんですけど、行っても、来ても、展示を見ようとしなくて外に出て写真を撮っていた人たちがばかりだったと思うんだけど、志津川に行ったときには、一体、あなたのところに何が見えていたんだろうと、誰かの言葉とか、見たものとか、何を感じ



てきて、何を伝えたいと感じているのか。伝えたいというよりかは、直接、それを確かめてきてほしいと言ってきていたけれども、何を確かめてきてほしいと感じたんだろうか。

何か、その辺りが、すごく皆さんの世代だけじゃなくて、私も阪神のときに中学生だったので、あまりその影響を、影響は受けているんだけど、直接、家が被害を受けたわけじゃないからね、そういう人たちが何かを感じ取るためには、大事なポイントになってくるんだと思うんですよね。

志津川に行ってきた、何をどういうふうな形で感じてきたかって言える。何を伝えたいの。井を見た。井かな。何やろうね。何を見てきたんやろう。何の写真をお願い撮った。何か、その辺が、もしかしたらスマホの写真を見せてもらうのが一番早いかもしれないけど、何の写真撮っているんやろう。

○濱田さん あっちに行って私が個人的に家に帰って親に見せたのは、バスで移動させてもらったんですけど、本当に何もなくて、その何もない画像だけを見せても「そうなんや、復興してないんやな」ってぐらいしか思ってもらえなかったんですけど、バスで通っているときに看板があるじゃないですか。今ここを真っすぐ行ったらここっていう看板に、よく見ていたら、ここまで津波が来ましてっていうのがあるんですよ。それを、見ていないと分からないじゃないですか、ただ歩いていても。

だから、私が個人的に1年生のときに行って驚いたのは、ここも一応被災地ですけど、そういうのは貼ってないじゃないですか。津波が来ていないっていうのもあるんですけど。私は、初めて津波が来た証拠を見たのがその標識だったんで、ここまで波が来たり、もしかしたら私たちが今東北に行って、立っていたその場所、もしかしたら誰かが、考え過ぎかもしれないですけど、誰かが流されちゃった場所でもあったのかもしれないなと思ったら、ちょっとどうやって言いたいのか分からないんですけど。

○奥村委員 何か、でも言いたいことは分かります。何かそこに行ったときに、写真では伝わらないけれど、何か話で聞いていた、こんなすごいことが、ほんまに目の前で、ここで実際あったんだということを体全体で感じられたときの、そのぞわとした感覚みたいなことが言いたいのかな。

○濱田さん そうですね。

○奥村委員 分かっていたなかったかな。

○濱田さん いや、もうそれをそのまま言ってもらえた

みたいな感じで。堤防が立っているんですよ。その堤防が高くて、めっちゃくちゃ。遠くから見ていてもすごく高くて、めっちゃ海はきれいやのに。

○奥村委員 それを、だから口で伝えても伝わらないと思ったんだよね。

○濱田さん それを私がどれだけ頑張って説明しても、私もあんまり上手に説明できないので。

○奥村委員 わかりますけど、多分、それって舞子の校長先生が阪神・淡路大震災のときに直接被災地の中に足を踏み入れられたときに感じたものを、今はもうまちを歩いても感じられないと思うんだけど、君たちが歩いてもね。10年たった東北は、まだ君たちが行ったときに、何かそういうものを感じられる何かがあるから、そういう気持ちになっているのかなっていう気がするね。

○濱田さん ありがとうございます。

○奥村委員 ごめんなさい。すごく、でも何か大事なところ、皆さんデジタル世代とかっていう話もあるけれども、切り取り方とか伝え方とか、そういうテクニカルな問題だけでなく、何でしょうね、ちょっと考えてみたいと思いますが、私もうまく言葉にできないので。だけど、そういうところがないと伝わらないんだろうね、経験していない人間には。そうなんだよね、きつとね。ごめんね。

○高原コーディネーター 何か切り取れなさがやっぱりあるんだけど、ただ何かをしようとするときには、切り取るっていうのではないかしらんけど、自分なりの何かの形にしなきゃいけないって、この現地でのわっと圧倒された自分と、今の何かを切り取ってでも人に伝えなきゃいけない自分の、何かそのギャップというのが、ずっと解決しない難しさでもあり、何かの出発点なのかなと、ちょっと今、お二人のやりとりで、個人的にちょっと思いました。

○中野コーディネーター ありがとうございます。

いや、本当そうですね。何か震災のことを聞いた見たりして、胸の中にぎゅっと来る瞬間ってあるじゃないですか。私は、私個人的には、7歳のときに阪神・淡路大震災が起こったので、体験しているんですけど、やっぱり阪神・淡路大震災当時の映像を見るときと東日本大震災のときの、別に比べるあれはないですけど、あのときの映像を見てね、阪神・淡路大震災のときのほうの映像を見てるほうが、何かすごく胸に重くのしかかるという感覚がやっぱりあるんですよね。でも、それは言葉にできないですけど、でもそういうような感覚をきつと皆さんもいろんな場所に行か

れて感じているんじゃないかなというふうにも想像をしました。

どうでしょう、フロアからほかに御質問とか、こういうことを聞いてみたいということがあれば、お伺いしたいんですけど、できれば若い人にもぜひ。手を挙げてくれました。お願いします。

○**岩崎さん** 関西大学社会安全学部奥村研究室の岩崎ケンジです。よろしくお願いします。

私、今、大学生なんですけれども、大学生になると、やっぱり年賀状とか、手描きで描かないんです。どうですか、年賀状とか手描きで描きますか。

何か、そういった手描きだからこそ伝わるっていう、感動というか、僕もそういうものがあるんだなというふうには感じました。

あと、何か皆さんが活動をするに関して意識を持っていることとか、何かここを大切にしている、ここが譲れないポイントだというのはありますか。

○**中野コーディネーター** じゃあ、舞子高校の松岡さん。

○**松岡さん** 私が一番大事にしているのは、阪神・淡路大震災とかのお話を聞くことが基本的に多いんですけど、その際に、思い出したくないっていう方がすごく多くいらっしゃるの、私のおばあちゃんもそうなんですけど、阪神・淡路大震災のお話とかを聞くときに、「もう思い出したくないからやめて」とかって言われることが結構あったりするんです。そのときに、無理に聞くんじゃなくて、その人が話したいなって思ったタイミングで聞くように意識していたりはしています。

○**三好さん** 私は、その聞いた後の伝え方で意識していることがあるんですけど、それはやっぱり分かりやすく伝えたいということを意識していて、やっぱり経験していないから、端的に言ってしまうと分からない人もいるかもしれないので、どういう情景でこんなことがあったとか、こんなことがあったから、こういうことがあったみたいな感じで、未災者にも分かりやすく伝えるように努力をしています。

○**濱田さん** 私たちは、物をつくるとき、「あにまるず」とか「かいけつ!あにまるず」とか、ああいうのをつくるときに意識していることなんですけど、私たち、何度も言うみたいに、13人変わった人たちが集まっているんで、描くときに1人1個描いてもらうんですよ。そしたら、13個違うデザインができて、すごい遊び心があるものになると思っていて、やっぱり小学生とか幼稚園の人によってもらうことが多いので、分かりやすく、舞子高校さんと一緒に、温か味があって、あと



は個人的にかわいいもの、かわいくて、手がつけやすいようなデザイン、手が触れやすいようなデザインにすることを心がけています。

○**宮定さん** この活動をする上で私が大切にしていることは、やっぱり地域とのつながりを大切にしていることです。

やっぱり、さっき先輩も言ってくれたとおり、「あにまるず」とかを作っていくゲームの中で、1人1つ手描きでそれも絵を描いているので、やっぱり一人一人の味が出るというか、それで一つのゲームが完成して、地域に配ることができて、つながることにもなっていると思うので、それをこれからも続けていけたらと思います。

○**高橋先生** 今、いろいろ言われているようなことは、多分、この子たちにはほとんどないと思うんです。

というのは、このうちのチームのこうなった一つの由来なんですけど、最初が生徒会の子らとかというのは動画で言っていましたけど、あれ、偶然なんです。私が適当に書いて出した書類が勝手に回って、いつの間にか教頭先生が生徒会の子らをどこかに合宿に行かせてというのがあって「そんなやつあったんっ?」ってというのが1回目やったんです。私は基本的に面白くなかったんですよ。生徒会の子であるとか、ボランティア部とかいう何かの「くり」でやるのが。

というのは、私、阪神・淡路大震災の年に長田の方の学校に転勤しました。転勤したとき、まだ200人近い人が学校の中にいたんですよ。定時制だったんですけど、いろんな方と接する中で一番話の中で感じたのは、あの震災の直後は誰も助けてくれなかったこと。地域に行政の人が来るとか、消防の人が来たときには、もう家がなかったとか言っていましたから。だから結局、どうしてみんなで頑張ったかということ、そこにいたいような人がたまたま集まって頑張った所は、地域や避難所がうまくいっていたけど、そういうのがないところは食べ物の奪い合いになったり、何か仲間割れ

したりみたいなことがしょっちゅうあったみたいなんです。報道では非常にいい話ばかりやったんですけど、その裏に物すごい暗い話を山ほど聞きました。5年間いたんですけど。

私がこの子たちにこういうチームをつくるようにもっていったのは、やっぱりさっき言っていましたけれども、いろんな子たちが集まっていろいろな話をする中で、同じような色の子やったら、出てこないものがぼんと出てくるんですよ。「へえ、そういうのがあるの」って。僕自身が「へえ、そんな考えがあったんやな!」というのが出てくるんですよ。

今、この子たちはそれをそのままやっていて、3年生になる子たちがいつの間にか2年生の子らの中にそれが浸透してって、今の1年生は、多分何も分からんのがいっぱいおるんですけど、多分来年の今頃になったら同じようなものをちゃんと共有できるようになっている。だから、私はあまりうるさいことも言わないし、教育も何もしていません。

だから、よく何か指導していると言われんですけど、指導なんかしてない。ほとんど。どっちかと言ったら、面倒を見るでもないし、何か一緒に遊んでやってみみたいな感じでね。運動部の顧問もやっているんですけど、授業の中で、このメンバーの今の同じ3年生の子の後ろに私が持っている陸上部の真面目な子が席に並んでいるんですよ。授業の前にその3年生の同じ同級生の子が、何か「キャンキャン」ってやったら、「何でそんなんできんの?」みたいな顔をしているわけですよ。グラウンドに出たときと別人になっていますから。「何であんなんで怒られへんの?」みたいな。もうタメ口をききまくりですから、

でも、何かあまりぴしゃっとした関係をつくると、やっぱり思考は停止するん違うかというのがありますね。このグループっていうのは、初めに言いましたとおり、何かやっぱり違うなというのは、一番はそこなんですよ。



合宿行ったときも他はみんな静かに語り合いながら計画しているのに、おまえたちだけやもんな、何かギャーギャー笑いながらやっていて「何なん、おまえたち?」みたいに見られていた。これがいいんかなっていうふうに思います。よそは迷惑かもしれませんけど。

○中野コーディネーター ありがとうございます。

やっぱりあれですか、高橋先生には、生徒さんがフルカラーに見えているんですかね。いろんな色を持っているというか、レインボーカラーというんですかね、何か、ともすれば学校って、生徒たちがいて、単色になりがちなのかもしないですけど、明石南高校はそうじゃなくて、生徒一人一人が色を持っている、何かそういう空間なのかなと、今日、話を聞いていて思ったんですけど。

○高橋先生 いや、そんなきれいな色と違うんですけどね。もっと何か「ド黒い」のとかいろいろ「濁った色」とかがあるんですけど、それが混じってきたら何か面白い色になるんですよ、不思議なことに。そんな感じですかね。

○中野コーディネーター ありがとうございます。

今日、ここまで話を進めてきまして、本当にいろんな色のついた、きれいな色、いろんな色のついたお話を伺えたなというふうに思いました。

せっかくなので、多田君、描いていただいた絵をぜひ見せていただけませんか。今日は実はグラフィックファシリテーターとして、皆さんの話を聞きながら、まさに絵を描いてくださっていたわけですね。

じゃあ、せっかくなので、話してくれた皆さんにも見てほしいんですけど、じゃあ一回裏返してもらってもいいですか。

じゃあ、パネリストの皆さんにも見えるような感じで、こんなふうにまとめてくださっています。

多田君として一番何かここがよかったなと思ったポイントって、ちょっと教えてくれませんか。

○多田さん 今日、参加させてもらって、僕も数年前までこっち側の人間やったんですよ。明石高専のD-PRO135°出身で、ほんの数年前まで参加者、生徒側としてここに参加していたんで、結構感覚は近いなと思ってたんですけど、今日聞いていて、ちょっと僕は安心したんですよ。

何でかと言うと、大体、この災害メモリアルアクションKOBÉをやっていると、大体、年明けのすぐに最終発表が来るんで、準備の山場が年末ぐらいになってくるんです、冬休みに入ったぐらいに。だから、僕らも

D-PRO135° っていう明石高専の防災団を立ち上げたときに、年末の冬休みにね、何でこんな世間がクリスマスで浮かれているときに、こんなデートもせず、こんな学校の狭い部屋で、こんな防災活動をせにゃいかんのかと言いつつ、めちゃくちゃ楽しんでおったんですよ、それを。それが楽しかったんですよ。別に、そんな崇高な目的とかは、僕だけかもしれないですけど、あんまりなかったんですよ。それを見ていると、今日見ている感じだと、物すごく何となくとか、何かやりたいみたいなのということが、すごい重要なのかなと思っていて、課題がもうはっきり分かっていたら、多分、この広い世の中って、何かしら解決されていると思うんですよ。何かもやもやしている、何かやりたいことはあるんだけどっていう、その感情をまず持つことが大事なのかなというふうに、今日聞いていてすごく思いました。何か自分と同じような感覚だなと思って、すごい後輩が、さっき意識が高いなというふうにすごい感じて焦っていたんですけど、ちょっと安心しました。

○中野コーディネーター 多田君、ありがとうございます。すみません、今、少し内々の打ち合わせをやっていました。(拍手)

ちょっと時間も来ましたので、最後の一周を短くして終わりたいなというふうに思うんですけども、実は今日、パネルディスカッションを企画する中で、高原研究員と私とで一応テーマを決めていました。どういうことが聞けたらいいかなというテーマですね。それは、気づく力と表現する力っていう、その2つを高校生の皆さん、それから先生方から聞けたらいいなというふうに思っていました。

本当はね、しっかりまとめてしまうと、もう今日出てきたいろんな多様な意見がそぎ落とされてしまうので、よくないなと思うので、しっかりまとめることはあまりしたくないし、しないんですけど、ちょっとだけ思ったことも含めて言わせてもらおうと、やっぱり気づく力、表現する力っていうのがいろんなところに落ちているなっていうふうに思ったんですね。例えば、なかなか阪神・淡路大震災、東日本大震災、風化っていうのが言われていますけど、けど、ちゃんと響くポイントってどこかにあるってことですよ。志津川に行って、そこで感じることであったりだとか、それから「淡路」という言葉がなくなっていってしまう。それによって、震災を体験していない人たちでも、ああ、自分たちのことが忘れ去られてしまっているんじゃないかというふうに感じてしまう、そういう響くポイン

トって、やっぱり一人一人にちゃんとあって、そういうものがあり続けることが、実はこれから震災を次の世代につないでいくときの一つのキーワードというか、ポイントになり得るんじゃないかなというのが、私、一つ思ったことです。

それから、高校生の皆さんが表現するときに大切にされていることとして、例えば温か味とか、かわいいとか、手が触れるとか、あるいは思いとか、そういういろんな形容詞が出てきました。ともすれば、表現するときに、私たちの世代といいますか、震災を何とか伝えていきたいなと思う世代からすれば、教訓とか、そういうものを言葉で表現することに何かこだわりがちだったような気もするんですけど、いや、でも今の高校生と違って、もっと手が触れるっていうようなところに実は動かされるんじゃないかなというヒントも今日頂けて、私としてもとても学びが多いものになりました。

最後、皆さんにぜひ私たちに教えてほしいことが1つあって、それは来年のテーマですね、来年、これはそれぞれの学校でいいですか。ここの、このパネルディスカッションの、ああ、なるほど。じゃあ、来年、ここのパネルディスカッションでこんな話をしたいっていうのがあれば教えてほしいと思います。

これは難しいテーマかもしれないので、最初、じゃあ高原さんから言っていて、その後、じゃあ先生に言っていて、最後、じゃあ高校生の皆さんに聞いてみたいと思います。

じゃあ、言い出しっぺの高原さん、お願いします。

○高原コーディネーター 先に一つだけ、皆さんのお話を伺った感想をちょっとだけ話すと、これ、先月、福島の、彦根東さんも一緒にやってはった、ふたば未来学園の高校生とのお話なんですけど、その人たちと話しているときに思ったのは、この子らは、何かアリの触角ってあるじゃないですか、うろろうろろうして、何かあったらちょこんちょこんとしている、何か触角を持っている子たちやなっていうようなことを感じていて、基本、皆さんのお話でも、やっぱり何か触角をたくさんたくさんあっちこちに当てているような、何かそんな感じがいたしましたっていうのが感想です。

来年のテーマは、分からない。何となくって何だろうっていうぐらいです、個人的には。皆さんにお聞きしたいです。

○中野コーディネーター そうですね。なるほど、何となく楽しそうっていうところからいろんな活動が発生

しているところもあったので、その「何となく」っていうのが来年のテーマがいいんじゃないかというのが1つ目でしたね。

じゃあ、先に高橋先生、どうぞ。

○高橋先生 来年のテーマですか。一言で言えば、向き合うということ。

○中野コーディネーター その心は。

○高橋先生 いや、そのとおりです。

今ここでメインになっているのは、高校生であったり、大学生であったり、私が死んだ後でも、まだあと何十年も生きそうな人ばかりなんですけど、今いろんな専門家が南海トラフの地震が30年以内、30年以内って、もう5年も6年もたっているから、もっと短いん違うかと思うんですけど、でも京大の先生の中には、もう15年ぐらいだと言う方もいらっしゃるよな。間違いなくこの子たちのこれからの人生に関わってきます。そのとき被災地に住んでいるか住んでいないかは、全く関係ないと思いますね。これまでの大きな南海トラフの地震というのは、ほとんど歴史を変えるようなことになっていますから、今もし例えば宝永地震とか、そのレベルのものが起こったらもうほとんど首都機能から何から全部停止して大変なことになると思うんですよ。だから、自分の住んでいるところが被災してなくても、二次的な何か被災者になってしまうみたい。だから日本の国全体に関わってくるようなものになると。これ、私が言っているんじゃない。いろんな専門家の方が言っていますから。そのときに、この子たちにもよく私が言っていることなんですけど、生き残った自分がどういう生き方をするのか、どういうふうに生きていくべきなのかという、そういう自分を今のうちに、そういう自分と向き合ってほしい。

だから、仮に今から20年後に起こったとしたら、20年後に、例えば20歳の人だったら40歳ですよ。家庭があったり、仕事でも何か守るものがたくさんあったりするような年代じゃないですか。そのときに、一体自分はどんな生き方をするのかという姿と向き合ってほしいというふうになんて思っています。

○中野コーディネーター ありがとうございます。

では、下村先生、お願いします。

○下村先生 本日は、本当にどうもありがとうございました。

私はもう退職を目の前にしてきているので、常々最近思っているのは、やっぱりバトンリレーかな。何々っていうのは、ちょっとあれなんですけど、バト

ンリレーということが、よく思います。

○中野コーディネーター ありがとうございます。

では、誰からでも、自分から行けるっていう人、いますか。特に、こういうものって明確になくてもいいんですけど、来年、こんなことを話してみたいなと、あるいは今年やり残したことで、来年、こんなことをしてみたいなでもいいですけど、では、年齢順で行きますか。じゃあ、最初、松岡さんですね。

○松岡さん 私は、来年は大学のほうに進学するので、こっちに関わるかは正直分からないんですけど、自分が関わるとしたら、私は防災とかを勉強しとって、いろんな防災とかにあんまり興味ない人に、何で防災を勉強すんのかって言われたりするし、何かちょっと変なやつって見られたりするんですけど、何かここに参加しとる人に聞きたいのは、何で防災とかに関わろうと思ったのかなとかっていうのを知ってみたいなって思うし、現地に行くことが大切っていうのは、正直、みんな分かっているかなとは思いますが、現地に行くと変わったりとか、何かどう考えが変わったのかとか、何かそういういろんなことを知れるような、何か意見交換とか、そういうのがメインでできたらいいんじゃないかなと思います。

○中野コーディネーター ありがとうございます。

じゃあ、濱田さん。

○濱田さん テーマって言われて、ちょっと考えたけど、ちょっとテーマがよく思いつかなかったんですけど、ここをたくさん知ってもらわないといけないっていうのが今日出たんですけど、今年したんですか、絵を描くのは。

○中野コーディネーター 今年やりましたね。

○濱田さん これ、全然できなくていいと思うんですけど、あそこにかかっているカーテンって変えないんですか。

○中野コーディネーター カーテン、なるほど白いカーテンですね。

○濱田さん ああ、そうです。あれにそういうのを描いたら。私がしたいだけなんですけど。楽しいと思うんです。

○高原コーディネーター 私だけではない、私も。

○濱田さん やってほしいです。

○中野コーディネーター なるほど、そうですね。それに、外からも見えるかもしれないですもんね、あそこに絵を描くと。

○濱田さん 写真スポットになると思います。

○中野コーディネーター ああ、写真スポット。

○濱田さん いいんか分からないんですけど、来る理由になったら。

○中野コーディネーター なるほど。

○高原コーディネーター 大変いいと思います。

○中野コーディネーター センター長もいらっしゃいますので、来年以降、いいアイデアをもらったかなと思います。ありがとうございます。

じゃあ、どちらでも、三好さん。

○三好さん テーマではないかもしれないんですけど、こういう場を何か大学生と高校生との交流できる場にもしてほしいなと思って、今回、高校生ばかりの話だったので、大学生の話も聞いて、どんなことを思っているのだろうっていうのを聞きたいなと思ったので、やりたいです。

○中野コーディネーター なるほど、ありがとうございます。

○宮定さん 私は、ちゃんとした一言のテーマとかではないんですけど、知るということで、地震を知ることなんですけど、やっぱり幾ら調べたりとかしても、経験していない身としては未知数だと思うので、調べて出てくることはたくさんあると思うし、学校で昨年度避難訓練を1回したんですけど、やっぱり私が通っていた中学校では、校舎からグラウンドに出てくるまでの時間とかを何分とか計られていたりしたんですけど、高校でやった避難訓練とかは、すごく緩いというか、歩いていたり、何か軽く見られているというか、義務教育が終わったってということもあるかもしれないんですけど、中学校と全然違う避難訓練で、やっぱり甘く見られているのかなと思うところもあったので、人それぞれやりたいこともあると思うので、やっぱりこの30年以内とか15年以内で起こると言われてい

る南海トラフ巨大地震が起こった後でも生きて自分がしたいことを楽しくできるように、もっと地震のことを知って、周りのみんなにも広げて、もっと危機感を持ってもらったらいいなと思います。

○中野コーディネーター なるほど、ありがとうございました。

いや、本当に皆さんが様々なビジョンをもう既に描いてくれているんだということがよく分かったので、ぜひ今日頂いたテーマ・意見とかをですね、また企画委員会のほうでも話し合って、来年の、どういうふう一緒に進めていしましょうかということを決めたいと思います。

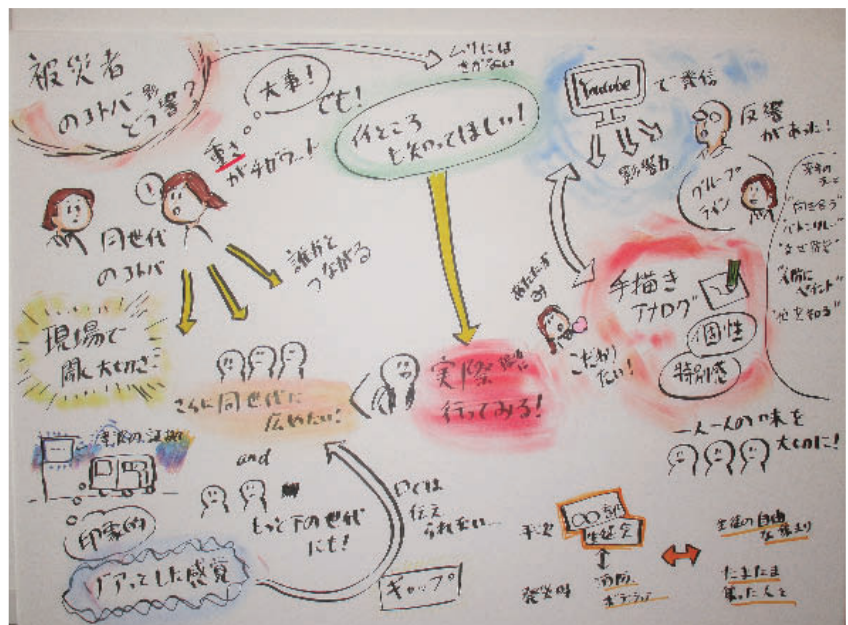
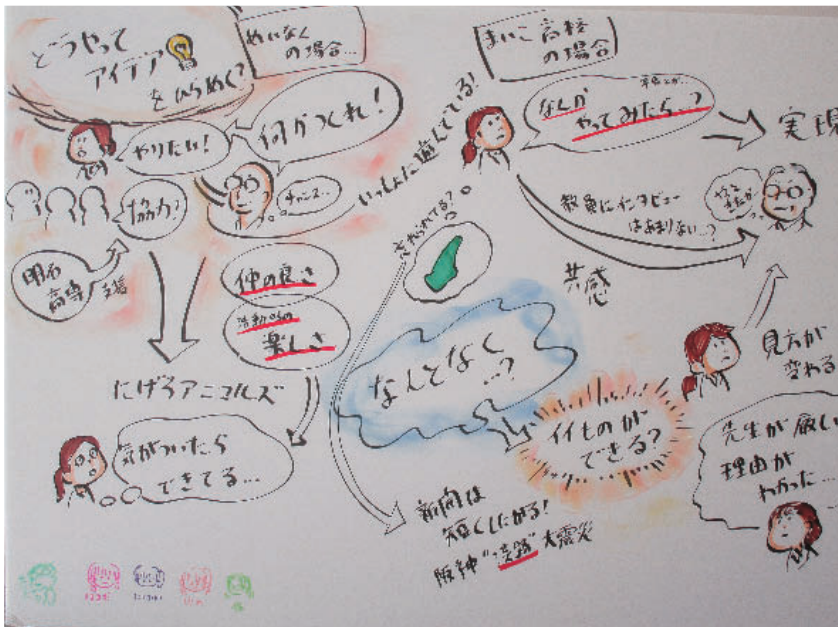
3年生のお二人はもう卒業ですけど、2年生、1年生は、ぜひ来年以降も参加してくれると信じて続けていきたいというふうに思います。

では、ちょっと時間も参りましたので、今日はこれでパネルディスカッションを締めたいと思います。皆さん、どうもありがとうございました。(拍手)

○司会 中野さん、高原さん、多田さん、兵庫県立舞子高等学校、兵庫県立明石南高等学校の皆様、会場の参加者の皆様、ありがとうございました。いま一度、盛大な拍手をお願いいたします。



グラフィックファシリテーション 記録



閉会のあいさつ

○人と防災未来センター河田センター長

センター長の河田でございます。

今日も「KOBE のことば」ということで、いろいろディスカッションをやっていただいたんですね。それで、皆さん、今、コロナの問題で、日本だけじゃなくて世界的に大変じゃないですか。災害とコロナってどこが違うんですか。僕は一緒だと思っているわけ。でもね、コロナは難しいんですよ。なぜかという、「災害文化」という言葉を知っているでしょう。つまり、災害については、私たちの経験・体験というものが結構被害を小さくしているというところがあるんですよ。

ところが、コロナっていうのは、昔、例えばペストっていう言葉を知っているでしょう。昔はね、ペストのほうが大変だったんですよ。これは、1347年にペストがイタリアに上陸して、3年かかってスウェーデンまで行って、当時、1億人の人口が7,000万人に減ったっていうのが、初めてこのパンデミックの恐ろしさっていうのが分かった事例なんです。それからずっとこの問題は、1890年代まで病気であるということが分からなかったのも、大変だったんです。

だから、今、ヨーロッパの古い都市へ行きますと、必ずペスト塔というのがまちの真ん中にあるんです。それだけたくさんの方が亡くなったということなんですけど、文化がないんです。ですから、3密対策とか、ロックダウンというのは、あれは文化じゃないんです。もうそれしかないっていうことで、この死者をどう減らすかということかしか出てきていないんです。

今日、「KOBE のことば」っていうのは、これはずっと毎年のテーマにさせていただいているんで、特に2018年には、この防災に関わる言葉が「もやもや」という、要するにはっきりしないということがテーマになったんです。

皆さん、今は知っておられるように、雨が降って川が氾濫するかもわからないとなったときに、避難指示とか勧告が出ても、住民は逃げないんです。1%も逃げない。1万人に避難指示・勧告が出ると、逃げる人は数十人なんです。

ですから、僕は気象庁に、避難情報を改善するのはやめろって言っているんですよ。正確、迅速、詳細に情報を出したって、住民は動かないって。なぜか分かりますか。文化じゃないからなんです。文明すなわち理屈だけじゃ、住民は動かない。

だから、先ほどの議論で、要するに言葉っていうのは、コミュニケーションのツールであって、内容が問題なんで、文化を伝えているんですよ。これは、何も言葉だけじゃなくて、写真もそうだし、イラストもそうだし、音楽も絵画も全部背景に文化があるから、我々は感動するんですよ。

ですから、この「メモリアル・コンファレンス・イン神戸」から始まって、26年続いているんです。10年ごとに内容を変えて来ているんですけど、いよいよ、いわゆる災害に対処するにはどうしたらいいかって考えたときに、私たちは人間だから、言葉の背後に文化がないとインパクトがない。

ですから、この1月17日に毎年ここで慰霊の式典をやるじゃないですか。私は、このひょうご安全の日推進県民会議の企画委員長をしているので、1.17の宣言を毎年書いているんですよ。そこには、必ずこの災害の体験・経験を忘れない、活かす、備える、伝えるっていう、この4つの言葉を宣言文に入れるようにしているんですが、経験・経験を忘れない、活かす、備える、使うというのは、とてもはっきり申し上げて不可能に近いんですよ。

ですから、被災者の方は、いつも起こってから、経験とか体験をもっと勉強しとけばよかったとおっしゃるんだけど、やっぱり文化というものを伝えることの難しさっていうのを私たちは考えなきゃいけないと思うんです。

ですから、これから何をしなければいけないかと言うと、この阪神・淡路大震災の教訓・体験を本当に私たちの生活の中で活かすにはどうしたらいいかって、生活の中で活かすっていうことは、文化にすることなんです。知識だけじゃ役に立たないんです。知恵になって、それが日常の習慣になるような形にまで持っていかなないと、この震災の体験・経験は役に立たない。

ですから、今、被災地にボランティアで行っていただくというのは、とてもいいんですよ。なぜかという、義援金を出してもですよ、災害の苦しさをいうのは分からないんです。なぜかと言ったら、文化はお金を出したって分からないんですよ。

ですから、もちろん体験・経験すればいいんですけど、災害の場合は、体験・経験をすると命を失う可能性があるんです。それだったら、やっぱり経験・体験する前に賢くならなきゃいけない。賢くなるっていうのは、私たちの文化にするっていうことの重要性を教えてくれているっていうことなんですよ。

ですから、災害の問題なんかは、他人事と思っちゃったら、もうどうしようもないんですよ。

ですから、我が事意識っていうか、これ、我が事っていうのは、その人の生き方の文化ですからね、そういうものに持っていかなきゃいけない。

今日、いみじくもパネルディスカッションで、もやもやとか、何々したいとか、何か明確な内容を伝えるということでないということが大切だっていうことを皆さんは教えてくれたじゃないですか。

ですから、この災害の問題だけじゃなくて、私たちの生活っていうものは、この文化っていうものがベースにあるということと、この災害は教えてくれているって、そして災害で賢くなった人たちの知恵とかをどう活かすかっていうか、これがとても大事だということも、今日、パネルディスカッションで教えていただいた。

それから、午前中、リモートも含めていろんなことを発表していただきました。これまで、この会合では、リモートでやるなんていうことは考えたこともなかったんです。ですけども、このオンラインで参加していただいて発表していただくのを聞いていると、これからのこの活動は、会場だけで収まるのではなくて、リモートも併用して、たくさんの方に参加していただきたい。

現場だけで、ここでやるとなると、人数には限りがありますので、メディアの方が後でいろんな形で伝えていただけますけどもね、リアルタイムにこういうリモートでも参加していただいて、やっぱり参加者の数を多くしないと、こういう文化っていうものなかなか広がらないと思いますので、このコロナも唯一いいことを教えてくれたのは、要するに、リモートを使うと同時にたくさんの方と共有できるというか、こういうものは今までできなかったの、これを活用しながら今後の活動を継続したいと思っていますので、高校を卒業して大学生になっても、リモートだと参加できますので、よろしく願いいたします。

どうも今日はありがとうございました。(拍手)



河田恵昭センター長

災害メモリアルアクション KOBÉ2021 のことば



災害メモリアルアクションKOBÉ

ACTION 2021 のことば

私たち（めいなん防災ジュニアリーダー）は部活じゃない、
一人ひとりのキャラが濃い。**自由に騒がしくて楽しい。**

私は生徒会や部活という括りでやるのが面白くなかった。

それは、震災直後にいろんな人から話を聞いて感じたことからそう思っている。

震災直後は誰も助けてくれなかった。どうしたかと言うと、そこにいた、いろんな人がたまたま集まって、頑張ったところは地域や避難所はうまくいったけど、それがなかったところは食べ物が奪い合いになったり、仲間割れするということがしょっちゅうあったらしい。

だから、びしゃっとした関係つくると思考が停止するんじゃないかと思っている。

いろんな子が集まって、色んな話をされていて、そうするとポンとでてくるんですよ！
「へ～そんなんあるの？」というのが。

手書きは、デジタルに比べて
あったかみもあるし、一人ひとり文字が違うから、
その人が書いた気持ちも伝わると思う。

逃げろアニマルズは、最初は軽い気持ちで
自分がしたいから始めて、
みんなが協力してくれて作成できた。

（年表は）簡単にというか、
なんとなくやってみて、
なんかいい感じになった。

東日本大震災の時、私は小学生で、
ニュースを見て、キャスターの言葉を聞いていたけど、
実際に現地に行って
同じ歳位の人から聞く言葉は何倍も重たい、
考えるものがあつたし、
全然違うなと思った。

私たちが行った宮城県福島県の町はまだまだ全然復興してないですけど、
めっちゃくちゃいい町なんですよ！
そのことを私から伝えることも大切なんですけど、ぜひ行ってほしい。
その地面を踏むっていうのは全然違うと思う。
ぜひ行って欲しいので、もっといいところも伝えていきたい。

気づく力と表現する力が
いろんなところに
落ちているなと思った。
震災が風化していると
言われているが、
ちゃんと響くポイントが
どこかにある。
一人ひとりにちゃんとあつて、
そういうものがあつて続けることが
震災を次の世代に
伝えていくことのポイントに
なりうるんじゃないか。

南海トラフ巨大地震が起こっても、
生きて、自分がしたいことを楽しくできるように、
もっと地震のことを知って、周りのみんなにも広めて、
もっと危機感を持ってもらいたい

2018年のテーマは「もやもや」、今日のパネルディスカッションでも「なんとなく」といった
はっきりしない、明確でないもの＝「文化」が大事だということを教えてもらった。
言葉はコミュニケーションのツール。**言葉の背後に文化がないと伝わらない。**
文化を伝えることの難しさを私たちはこれから考えなければいけない。

プログラム

伝える大震災、つなげる防災

災害メモリアルアクションKOBÉ

ACTION 2021

KOBÉのことば

定員：先着60名
参加無料

※ 密を避けるため、会場内の参加者数を常に60名以内に保ちます。60名を超える場合は、入場をお断りいたします。※ 会場にお越しになる場合は、マスク着用をお願いします。※ 感染拡大の状況により会場での開催を中止とさせていただきます。

活動報告会

日時 **2021.1.9[SAT]**
10:00 → 13:15

会場 阪神・淡路大震災記念
人と防災未来センター

これまで「阪神・淡路大震災」を経験した世代が教訓と提言をまとめた「メモリアルコンファレンス・イン神戸（1996～2005）」、そして、その教訓を次世代に伝えるために「災害メモリアルKOBÉ（2006～2015）」を実践してきました。

2016年からこの先の10年を見据え「KOBÉのことば」をキーワードに「災害メモリアルアクション KOBÉ」という取り組みを開始しました。阪神・淡路大震災のつらい経験を二度と繰り返したくないという強い思いから、学んだことを次に活かすことができる形でつないでいこうという取り組みです。大震災から20年以上経った今だからこそ聞けることば。今しか聞けないことば。その個々の経験を未来へどう活かせるか。世代を超えて、共有し、話し合い、未来へつないでいく。今のKOBÉだからこそできるアクションです。

近い将来起こりうる南海トラフ巨大地震を見据えて、これから大震災を経験するかもしれないすべての人びとへ、防災の意識を継続させ、少しでも被害を小さくするために。「未災者」が大震災を知り、さらに「未災者」に伝え、つないでいく、新しいチャレンジです。

私たちはこれまでにないアクションにより、継続的な取り組みの検証と検討の場を通して、将来の被災者を減らします。

プログラム

※ 敬称略

10:00 開会挨拶

災害メモリアルアクションKOBÉ 企画委員会委員長
人と防災未来センター 震災資料研究主幹
京都大学防災研究所 教授 牧 紀男

10:05 活動発表

発表：① 兵庫県立舞子高等学校
② 兵庫県立明石南高等学校
③ 滋賀県立彦根東高等学校
④ 国立明石工業高等専門学校 D-PRO135°
（明石高専防災団）地域連携チーム
⑤ 国立明石工業高等専門学校 D-PRO135°
（明石高専防災団）開発チーム
⑥ 神戸学院大学 現代社会学部 社会防災学科 安富ゼミ
⑦ 関西大学 社会安全学部 奥村研究室
⑧ 兵庫県立大学防災リーダープログラムチーム

12:15 パネルディスカッション 「KOBÉのことば ～新しい表現～」

コーディネーター：京都大学防災研究所 巨大災害研究センター 助教
中野元太
人と防災未来センター 主任研究員 高原 耕平
グラフィックファシリテーション：滋賀県立大学 環境科学部環境建築デザイン学科4年
多田 裕亮
パネリスト：兵庫県立舞子高等学校 生徒2名及び教員
兵庫県立明石南高等学校 生徒2名及び教員

13:10 講評・閉会挨拶

災害メモリアルアクションKOBÉ 企画委員会顧問
人と防災未来センター長 河田 恵昭

主催：人と防災未来センター、京都大学防災研究所

共催：京都大学防災研究所自然災害研究協議会近畿地区部会

企画：災害メモリアルアクションKOBÉ企画委員会

後援：兵庫県教育委員会/神戸市/神戸市教育委員会/朝日新聞神戸総局/読売新聞神戸総局/毎日新聞神戸支局/産経新聞神戸総局/神戸新聞社/NHK神戸放送局/ラジオ関西/神戸学院大学/明石工業高等専門学校/関西大学社会安全学部



災害メモリアルアクションKOBÉ

ACTION 2021

全体テーマ:

KOBÉのことは

「KOBÉ」とは、阪神・淡路大震災の被災地域全体と、災害の影響を受けたひと、そして災害後まちのために活動したひと、すべてを表現しています。

阪神・淡路大震災から26年、大震災を直接経験していない若い世代の人たちが、災害を経験した人々へのインタビュー、アンケート、交流事業などの活動を通じて、次世代に伝えるべき「KOBÉのことは」を紡ぎ、活かし、拡げます。「過去・いま・未来」を見据え、世代を超えて活動する、最先端のアクションです。

兵庫県立舞子高等学校



活動テーマは「同年代に語り継ぐ～未災者の視点だからこそ見えること～」。学校の先生方から震災経験と今の思いを聞かせていただき、そのことは冊子と年表にまとめ、全校生に共有します。震災後、どのような時間や取り組みを経て、今私たちが過ごしているまちや学校があるのか。皆で考えるきっかけにしたいと思います。

神戸学院大学 現代社会学部 社会防災学科 安富ゼミ



安富ゼミでは、2017年度からの企画に参加し、「阪神・淡路大震災の教訓って？」をテーマに調査、研究を続けて毎年発表してきました。今年は、人的被害を最小限に抑えることができた「丹波豪雨災害」をピックアップし、研究・調査をしています。現地を訪れ、自治会長や市役所職員の方々からインタビューを行いました。その内容をもとに、何故これ程に犠牲者を少なく出来たのかを探っています。

関西大学 社会安全学部 奥村研究室



阪神・淡路大震災では家屋倒壊や家具転倒によって多くの命が失われました。その結果、それまでの「地震対策は火災対策」との認識は改められ、「耐震対策や家具固定」が重視されるようになりました。私たちの研究室では、その後の災害で発生した家具転倒による犠牲者を分析し、当時の教訓は生かされているのかを検証しています。

パネルディスカッションテーマ:

KOBÉのことは ~新しい表現~

KOBÉのことはの表現はさまざま。学生たちは「震災」を伝えるアクションを模索するなかで、新しいことばの表現を生み出しています。いまの若者だからこそ伝わる表現とはどのようなものなのでしょうか。先生の「震災」を同年代に伝える舞子高校生と、映像をつかって「震災」を発信する明石南高校生とともに、新しく生まれ変わるKOBÉのことはの表現を考えます。

兵庫県立明石南高等学校



平成25年度兵庫県教育委員会の防災ジュニアリーダー育成事業により誕生して8年目になりました。現在では校内外での活動が年間25回に及び、地域でも注目される活動となってきました。今年度は新型コロナウイルスのために対外的な活動ができませんが、次年度に向けて可能な限りの取り組みを続けています。

滋賀県立彦根東高等学校



彦根東高校新聞部は、2011年の東日本大震災発生以来、福島のことを追いかけてきました。そして、「まだ終わっていない震災」の姿を描こうと、今も取材を続けています。昨年から「災害メモリアルアクション」に加えていただき、神戸からも学べるのがたくさんあると感じました。これから起こる災害のためにも、過去の震災の記憶を風化させてはいけません。神戸や福島から、高校生が、未災地・滋賀が、学べることを、伝え続けます。

国立明石工業高等専門学校 D-PRO 135° (明石高専防災団)



地域連携チーム
今年は神戸大学附属小学校で出前の防災授業を行いました。授業では、防災ゲームのチャレンジ!と避難所での感染症対策を交えた講義を行いました。また、新型コロナ感染症対策について勉強し、阪神・淡路大震災の災害対応でご活躍された、櫻井さんと中溝さんのインタビュー内容を含めた防災新聞を作成しました。



開発チーム
防災ゲームの開発・改良を行っています。昨年開発したChoiceの体験会での意見を基に、ルール修正や、地域に合わせたボードとする改善を進めています。さらに、大阪防災プロジェクトと共同で「チャレンジ!」のオンライン化も行っています。高専生ならではの視点を活かして遊んで学べる防災ゲーム作りを進めています。

兵庫県立大学防災リーダープログラムチーム



兵庫県立大学防災リーダープログラム(副専攻)の学生たちは、減災・防災・復興について、地域住民と共に実践的な活動を通して学んでいます。その活動の一つとして、尼崎小田高校の高校生たちと共に取り組んでいる、高校を中心とした地域防災活動について紹介します。

お問い合わせ:

阪神・淡路大震災記念 人と防災未来センター事業部普及課
Tel: 078-262-5066 Fax: 078-262-5082

本研究は京都大学防災研究所共同研究(令和2年度一般研究集会2020K-03)の成果によるものです。

災害メモリアルアクション KOBЕ 企画委員会名簿

※2020年5月1日現在

役 職	氏 名	所 属
企画委員長	牧 紀男	京都大学 防災研究所 社会防災研究部門
委 員	伊藤亜都子	神戸学院大学 現代社会学部 社会防災学科
	卜部 兼慎	NPO法人防災デザイン研究会 株式会社G K 京都 第1デザイン部
	太田 敏一	防災リテラシー研究所
	大塚 毅彦	国立明石工業高等専門学校
	大山 武人	NHK 大津放送局
	奥村与志弘	関西大学 社会安全学部
	高橋 徹	兵庫県立明石南高等学校
	中野 元太	京都大学 防災研究所
	西口 正史	ラジオ関西編成営業局
	馬場美智子	兵庫県立大学大学院 減災復興政策研究科
	福岡 龍史	株式会社 エフエム・プランニング
	藤村 知行	彦根東高等学校
	榎田 順子	兵庫県立舞子高等学校
	本塚 智貴	国立明石工業高等専門学校
	安富 信	神戸学院大学 現代社会学部 社会防災学科
	横山 愛子	株式会社G K 京都 第1デザイン部

サポーター	甲斐聡一郎	兵庫県災害医療センター
	越山 健治	関西大学 社会安全学部
	近藤 誠司	関西大学 社会安全学部
	諏訪 清二	防災学習アドバイザー・コラボレーター
	細川 顕司	公益財団法人 市民防災研究所
	松元 正博	NPO法人 人・家・街・安全支援機構
	宮本 匠	兵庫県立大学大学院 減災復興政策研究科
	矢守 克也	京都大学 防災研究所
	高森 順子	大阪大学大学院 阪神淡路大震災を記録し続ける会

顧 問	河田 恵昭	人と防災未来センター・関西大学
	土岐 憲三	立命館大学衣笠総合研究機構 歴史都市防災研究所（特別研究フェロー）
	新野幸次郎	神戸大学（名誉教授）
	林 春男	防災科学技術研究所
事 務 局	池田 亨	人と防災未来センター 副センター長
	今井 隆介	事業部長
	多治比 寛	研究部長
	毛勝 敏樹	普及課長
	山本明紀子	普及課課長補佐（事務主担当）
	高原 耕平	主任研究員（研究部主担当）
	ピエロ アウタイ コンノ	研究員
	正井 佐知	研究員

※新野幸次郎顧問におかれましては、令和2年12月13日ご逝去になられました。

災害メモリアルアクション KOBÉ2021 参加学生名簿

※順不同

グループ名	氏 名	所 属	
兵庫県立舞子高等学校	松岡 紗輝	兵庫県立舞子高等学校 環境防災科	3
	宮本 莉沙	兵庫県立舞子高等学校 環境防災科	3
	戸澤 幸咲	兵庫県立舞子高等学校 環境防災科	3
	前林 亮香	兵庫県立舞子高等学校 環境防災科	3
	森 亮太	兵庫県立舞子高等学校 環境防災科	2
	三好 彩香	兵庫県立舞子高等学校 環境防災科	2
	大崎きらり	兵庫県立舞子高等学校 環境防災科	1
	高橋 茉那	兵庫県立舞子高等学校 環境防災科	1
	柳田 愛実	兵庫県立舞子高等学校 環境防災科	1
兵庫県立明石南高等学校	濱田 桃花	兵庫県立明石南高等学校	3
	西岡 ゆき	兵庫県立明石南高等学校	3
	宮定 夢実	兵庫県立明石南高等学校	2
	堀 一葉	兵庫県立明石南高等学校	1
滋賀県立彦根東高等学校	前川 萌愛	滋賀県立彦根東高等学校	2
	村木 春桜	滋賀県立彦根東高等学校	2
	湯浅 完	滋賀県立彦根東高等学校	1
国立明石工業高等専門学校 D-PRO135° (明石高専防災団) 地域連携チーム	山森 陽太	国立明石工業高等専門学校	3
	大坪 七海	国立明石工業高等専門学校	1
	長手 美滯	国立明石工業高等専門学校	1
国立明石工業高等専門学校 D-PRO135° (明石高専防災団) 開発チーム	奥田 耕大	国立明石工業高等専門学校	3
	藤田 裕	国立明石工業高等専門学校	2
神戸学院大学 現代社会学部 社会防災学科 安富ゼミ	北脇 敬吾	神戸学院大学 社会防災学科 安富ゼミ	3
	佐藤 菜都	神戸学院大学 社会防災学科 安富ゼミ	3
	小林 千香	神戸学院大学 社会防災学科 安富ゼミ	3
	楠 海斗	神戸学院大学 社会防災学科 安富ゼミ	3
	池谷 柊斗	神戸学院大学 社会防災学科 安富ゼミ	3
	大田明日香	神戸学院大学 社会防災学科 安富ゼミ	3
	佐々井将人	神戸学院大学 社会防災学科 安富ゼミ	3
	釜谷 颯太	神戸学院大学 社会防災学科 安富ゼミ	3
	豎山 智也	神戸学院大学 社会防災学科 安富ゼミ	3
	張 嘉豪	神戸学院大学 社会防災学科 安富ゼミ	3
	難波 巧	神戸学院大学 社会防災学科 安富ゼミ	3
	山田 将大	神戸学院大学 社会防災学科 安富ゼミ	3
	赤松 伸哉	神戸学院大学 社会防災学科 安富ゼミ	3
	野口 春	神戸学院大学 社会防災学科 安富ゼミ	3
関西大学 社会安全学部 奥村研究室	楠木皐耶香	関西大学 社会安全学部 奥村研究室	4
	山崎 健司	関西大学 社会安全学部 奥村研究室	3
兵庫県立大学	櫻井 未久	兵庫県立大学 理学部	3
	西嶋 沙来	兵庫県立大学 看護学部	3

発表風景等

キックオフ会 (ワークショップ)

2020年9月19日



中間発表会 (ワークショップ)

2020年11月22日

